
きらりキラリ

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらりキラリ

【Nコード】

N5634T

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

芹沢恭太、30歳。とあるサッカーチームに所属している。本業は、ボロ旅館の旦那さん。夢と現実の折り合いをつけ、これからも生きていくのだろうと思っている。そんなある日、旅館に外国人の男がふらりとあらわれた。その男は、世界的に有名な元サッカー選手、コージであった。

第一章 コージ

1

きゆうじゆうにつ、きゆうきゆうさんつ、きゆうじゆうよんつ、
きゆうじゆうごつ

「あー、失敗だ、くそっ」

右の爪先で軽く蹴り上げたつもりが、力を込めすぎてしまったよう
うでボールはあさつての方向に飛んでいつてしまった。

失敗という事実は自分だけが知ればいいことなのに、下手くそに
蹴られたボールが腹を立てたのか、その一秒後、周囲の人々全員の
聴覚に訴える結果となった。早い話が、飛んでいったボールが客間
の窓ガラスを割ってしまったのである。

やべえ、あれ、人の泊まってる部屋だよ。

芹沢恭太は割ってしまった窓へと早足で駆け寄った。

「大丈夫ですかあ」

などと、ぽっかり空いた窓枠から内部を覗き込んだ。

外出中なのか、人の気配はないようだ。

恭太はとりあえずほっと胸を撫で下ろす。

しかし、他の部屋の窓が、ひと部屋またひと部屋と開いていった。
宿泊客たちが、なにごとかという顔で恭太のほうを見ている。

「あ、すみません。なんでもありませんから。ちよっと窓ガラスが
割れちゃって」

割っちゃって、がこの場に適切な表現なのだが、わざわざいうこ
とでもあるまい。リフティングしていたのを見ていた人には、分か
ってしまっているだろうけれど。

「ター坊、あんたまたやったね！」

老婆が怒り心頭といった形相で飛び出してきた。鬼にしか見えな
い顔だが、恭太が人間である以上、この老婆もまあ人であるう。芹
沢トモ子。恭太の祖母なのだから。

宿屋せりざわ。

芹沢恭太が経営している旅館の名前である。

北海道H市の南、海に面してはいないがすぐ近くにある。

H市は、近年すっかり寂れてはいるが、由緒のある観光地。温泉が出て、新鮮な魚介もたっぷり味わえるところだ。

恭太は宿屋せりざわの主人であるが、実際に切り盛りしているのは祖母のトモ子であり、そしてその実権や経験は、恭太の妻である芹沢愛子に受け継がれつつある。しかし立場がなかうと主は主だ。悲しいかな、そのご主人様は、首を掴まれた子猫のように小さくなって、トモ子に連れられて建物の中に入ってきた。

愛子が二人の女性従業員を連れてあたふたと早歩きしているところに出くわした。

「恭ちゃん、さっきの音、もしかしてまた」

いぶかしげな視線を亭主に向ける愛子。

「もしかしてもなにも、なんにもないよ」

「もしかしてもなにもない、だろ。日本語は正確に使いな。ガラス割ったくせに、なんにもないだろ。まったくター坊ったら、サッカーだかなんだか知らないけど下手くそのくせに暇さえあればボール蹴ってるんだから」

「下手だから練習してんだろが」

いわれっ放しも面白くないので恭太はちよつと逆らってみた。でもやっぱり十倍になって返ってきた。

「ここで蹴るこたないだろ。下手が多少練習したって変わりやしないよ。そんなことしてて割れたガラス代以上に稼げるのかい。そもそもサッカー選手だなんていって、お金かかるだけで一円の稼ぎにもなってやしないじゃないか。多少なら趣味ってことで我慢もするさ。でもこんなところで下手クソ披露してあげくの果てには窓を割って。ただでさえ昔に比べてお客さんが減ってるんだよ。これ以上いなくなったら、どうすんだい」

そしたら、親父みたいにラーメン屋でもやりやあいじゃねえか。

と、さすがにそれは口には出せなかった。いま現在養う家族（どちらかというと養われている？）と従業員を持つ身として、さすがにちよつと無責任過ぎる発言かなと思ったから。というのは自分の心へのいいわけで、単にまた十倍返しになるのが面倒なだけだ。

祖母と孫とがそんなやりとりをしている間にも、次々とやってくる従業員に愛子がテキパキと指示を出している。

従業員全員が去ると、愛子は大きく伸びをした。

「それで、窓ガラスの手配したの？」

「いや、まだ……」

「あたしやつとくからいいよ。恭ちゃん、変なとこに頼んじやいそうだもん」

いつもの業者だろ。そんな間違えるかよ。

と思ったが、思っただけで口には出さなかった。屋根修理でいつもの業者を呼ばずにたまたま手元にあつたチラシを見て電話してしまい、そこが悪質業者でぼったくられたことがあるから。

お金は損するし、馴染みの業者の顔は潰してしまうし、と、愛子とトモ子に散々小言をいわれたものである。

また、従業員が愛子に指示を仰ぎに来た。愛子にはこやかではないが、かといってこれっぽっちも不満顔を浮かべることもなく、手早く指示を伝えていく。

観光客自体が以前に比べて相当に減ってきているため、基本は暇なのであるが、そのため従業員数が少なく、忙しくなる時はこのように突発的に忙しくなるのだ。

「じゃ、あたし電話してくっから。はい恭ちゃん、どいてどいて」

愛子は亭主を押しのとけると、フロントの方へと小走りだ。

彼女の後ろ姿をしみじみと眺めている恭太。

ちよつと、遅しく、なりすぎだよな。

結婚したばかりの頃は、仕事のこともなんにも分からなくて、なんでもはいはい聞いてくれたのに。

どっちが主人なのか分かりやしない。

だつたらちゃんと仕事すればいいじゃないかと祖母にいわれそんなことを、心の中で呟いていた。

さて、愛子様の目まぐるしい活躍により仕事は迅速に進み、正午も過ぎ、ようやく落ち着ける時間が出来た。

従業員たちもみんな集まって、お茶の時間が始まった。

従業員、といっても人数も少ないので、ここで、この旅館で働いている者をすべて紹介してしまおう。

まず女性従業員。いわゆる仲居さん。

阿比留真弓、五十二歳。十六のころから、もう三十年以上も勤めている大ベテランだ。

田頭里子、三十四歳。

石館こづえ、三十七歳。お喋りで、彼女に重要なことを打ち明けようものなら、翌日には街中に広まっている。

続いて男性従業員。

岩寺蛇夫、六十二歳。もともと、旅館に出入りする植木職人であったが、職をなくし、五年ほど前から従業員として雇っている。

料理人。

片石亨、五十五歳。

富居新平、四十三歳。近くで料亭を経営しており、営業時間外にこちらに来てくれている。

これに、恭太たち三人を加えたのが、この旅館で働く全員である。部屋の隅にあるテレビには、昼のメロドラマが流れている。

十四型のブラウン管テレビ。画面の横に、縦一直線に並んだチャンネルボタンがあることから、相当な旧式だと分かる。

あと数ヶ月でアナログ放送も終わりだというのに、このテレビに限らず旅館全体としてなんにも地デジ対応の準備をしていない。

買い替えるお金がないのだ。

恭太は時折煎餅をかじり、お茶をすすりながら、黙ってテレビに視線を向けている。うっかり地デジの話しようものなら、「屋根修理にぼったくられてなければ全部屋設置出来ただけだねー」と

愛子の小言が飛ぶ。

とはいえ、アナログ放送終了までにはなんとかしないとな。この部屋は最悪テレビを撤去すればいいけど、客間でそうはいかないかな。今時テレビがないなんて、それだけで相当なマイナスポイントになるし。

草薙の馬鹿野郎、必要もないってのに地デジだなんだ余計なこと進めやがって。

ホテルはいいよな。電波来てなくなつて、エロビデオで儲かるもん。千円でカード買わせてさ。

ホテルの実情をまるで知らないの、好き勝手な文句をいう恭太。突然、玄関のガラス戸が開いた。まあ、だいたいの場合、突然開くものだが。

「マトバさん、いますか？」

入るなりその声をかけてきたのは、外国人の男であつた。

長身で、がっちりしている。スーツを着ており、一見すらりとしているが、中に相当量の筋肉が押し込められているのが分かる。大きな鼻が特徴的だ。一見若そうに見えるが目尻のシワなどから、四十代半ばくらいだろうか。

中南米に多く見られるような薄い褐色の肌。加齢のためか元々か、頭髮は少し寂しい感じた。

「マトバ、さん、ですか？」

田頭里子が応対した。さん付けするか躊躇したのは、男が旅館関係者か宿泊客か、どちらのマトバを求めているか分からなかったからだ。

「旦那さん、お客さまの中には、いないはずですよねえ」

恭太は頷いた。

帳簿を確かめてみるまでもない。もしもマトバなどという名前ならば、記帳の際に恭太の印象に残らないはずがない。

もしかして、この人……

「コーヘーさん。マトバコーヘーさんです」

やっぱりだ。

でも、どうしてうちに尋ねに来るのか。

「的場耕平さんは、もう亡くなってます。一昨日」

恭太は立ち上がった。

「オトトシって？」

「二年前」

流暢な日本語を喋るくせに、こんな簡単な言葉が分からないのか。外国人の男は、自分の指を一本、二本と折り曲げた。

「オー」

男は、がっくりと片膝をついた。

恭太が声をかけようと近寄ろうとすると、男はすっと立ち上がった。

「失礼しました。もう大丈夫です。それではまた」

深く頭を下げると、玄関の外へ出た。寂しげに微笑みながら手を振ると、ゆっくり戸を閉めた。

「なんだったんだ、ありゃ」

「さあ。こっちが聞きたいよ」

夫婦は顔を見合わせた。二人の顔にはおっきなハテナマークが浮かんでいた。

2

芹沢恭太はフェイントを仕掛けた。

右のアウトサイドでちゃんと外側へ蹴り出す素振りを見せ、足はそのままボール上を滑らせて、折り返すようにインサイドで内側へ。単純なフェイントであるが、二度連続で来るとは思わなかったのだろう。今度は見事、長岡巧を抜いた。

油断したわけではないが、ちよつとタッチの大きくなったところを、あつさりと後藤権三に奪われてしまった。

だが恭太は、すぐさま半ば強引に身体を入れて自ら取り返すと、
宇野井聡太へパスを出した。

宇野井聡太は小笠原慎二をかわすと、反転しつつヒールで横へパス。しかし大道大道おおみちだいどうが感じておらず受け損ね、ボールはラインを割ってしまった。

彼らがやっているのは、三対三に分かれてのミニゲームだ。

ここは、一応、サッカーグラウンドなのであるが、全面雪に覆われていて、ただの雪原になってしまっている。

元々は本当にただの野原であつた。十年程前、細い川に沿って一部を開拓し、サッカーの練習に使えるよう整備したのだ。

ちよつと雨が降ると靴の裏にベタベタと土がくっついてきて最悪だが、晴れているときは、適度なクッション性を持った快適なグラウンドだ。芝には及ばないが、そんなものはないのだから贅沢もいっていられない。とまあ、これは春から秋にかけての話であり、現在は、前述したように雪に覆われていて、みんなで掻き分けた狭い範囲でしか練習が出来ないのだが。数日も経つと凍つたりまた雪が積もつたりして大変だ。

彼らは、イクシオンACという社会人チームの所属選手である。

北海道の、道東ブロックリーグに所属している、将来のJリーグ入りを目指しているチームである。

日本のトップリーグであるJ1を一部とすると、五部に相当する。本当はもっとと大人数で練習出来ればいいのだが、みんな仕事に忙しくて集まらないのだから仕方がない。

今日はGKの木場芳樹きばよしきを入れても七人しかいないのだから。

運が良ければこのあと何人か遅れて来るかも知れないが、とにかく現在いる人数で出来ることをやるしかない。

将来のプロリーグ参加を目指しているとはいえ、現在のところプロ契約選手の一人もない完全なアマチュアチーム。それぞれ仕事を抱えている以上は、このような日もある。とはいえここ数年、このような日が非常に増えてきているのだが。

「もう疲れた。シュート練習にしようぜ」

後藤権三がどっかりとしゃがみ込んでしまった。

「お前、おれと同年だろが。まったく。タバコなんか吸ってつからだよ」

恭太は高校時代からの大親友の不甲斐ない姿を見せられて漏らさずにいられなかった。まだ三十歳のくせしやがって。

「バカ、おれ今吸ってないよ」

「今吸ってないだけだろ、今」

練習終わったら早速一服するくせに。

「酒とタバコは、仕事のストレスがあるからしょうがねえの」
いいわけしてやがる。

仕事というより、奥さんのストレスだろが。

権三の妻、花子は気さくで優しいが、亭主にだけはやたらと厳しいのだ。

店を抜け出してサッカーをやらせて貰っているわけだから、そうなるのも仕方ないのかも知れない。うちの愛子なんか、まだ優しい方だ。

とはいえやつぱり……集まりが悪いよなあ。恭太は、改めてそう思う。

試合の日には出てやってんだからいいだろ。あからさまにそんな考えを持っている者はいないだろうが、そんな雰囲気少なからずあるのは間違いない。みな、サッカーが好きだから続けてはいるものの、他のことや、仕事も大切なのだ。

サッカーで飯を食っているわけではない、という立場身分を考えれば当然の考え方ともいえるが。

恭太は比較的練習に参加している方だが、それはたまたま他の者よりも時間が作れるというだけの話だ。それなりに熱心であるのか、他に趣味がないから惰性で続けていられるだけなのか、それは自分でも分からない。

好きといえは好きだし、辞める理由もないし、と、とりあえず続けてはいるものの、冷静に考えるとこうしたピリツとしていない環境だとちよつとむなしいような気もしてくる。例えば、負けてあげ

るよと最初からいつている相手とポーカをやっているような。

現在二月下旬。あと数日で暦の上では春を迎えるといっても、ここは北海道、実際に周囲はまだまだ雪におおわれており、非常に寒い。

このグラウンドも、練習のために雪掻きした数メートルの円形以外は、完全に真っ白。白ウサギの似合う雪原である。

その雪原では先ほどから、ウサギではなく人間の子供達が遊んでいるのだが、いつの間にか、その中にひとり大人が混じっている。

恭太は気付いた。

先ほど、宿屋せりざわに姿を見せた、あの外国人だ。

ひとり屈み腰でなにか作業している。

どうやら、かまくらを作ろうとしているようだ。

だが、積もっているのは粉雪、さらさらとしてそう簡単には固まってくれない。悪戦苦闘している様子が遠目からでもよく分かる。

「無理だろ」

見ている権三が、ぼそりと呟いた。

外国人の男は、なおもかまくら作りを続けていたが、突然、わずかながら積み上げてきた作品を踏み付けて、早口で怒鳴り出した。

「ポルトガル語っぽいね」

「なんていったんだろ」

長岡巧と木場芳樹が話している。何故かは分からないが、みんなあの外国人に注目しているようだ。まあ、子供の中にいて目立つということだろうが。

「なぜ雪くつつかないですか！　じゃねえの？」

恭太。

「こんなやわな家に暮らせません！　じゃねえの？」

権三。

「なんだそりゃ」

「あの外人、さっき、うちにも来たんだよな」

権三の家、家庭料理店兼居酒屋である。

「的場さんいるかって？」

「最終的にはね。最初は黙ってモツ食べてたんだけど。途中で自家製プリンも頼んでたけど。別のテーブルで、うちの常連客が、キン肉マン知ってるかなんて話しててさ、歌の話になって、なんか違ってる気がするけどどこが違うんだろう、なんてやってたら、それはなんとかデース、って割り込んできて、そいつらと溶け込んだじゃってさ。おれよく分からないけど、まあ詳しくそうに楽しそうに話してたよ。そのあと突然、おれのほうに近寄ってきて、的場さん知ってますか、って」

「なんて答えた？」

「誰こいつ、って思ったし、的場さん死んだなんていいたくなかったんだよな。だから、『知ってるけど、遠いところに行っちゃった、もう帰って来ないよ』、っていつてやった。『オー』、って片膝ついてがつくり来てたよ」

「じゃ、その後におれんどこに來たんだな」

かまくら作りを諦めた外国人の男は、今度は子供達の輪に入っとなにやら話をしている。

子供たちは、誰かの持ってきたサッカーボールを蹴り始めた。

外国人の男も、中に混じり、奇声を上げて走り回っている。

「無邪気なもんだな。ちよつと本人から直接聞いてくるか」

恭太は歩き出した。

的場さんのなんなのか。それをただすために。

何者なんだ、あいつは。

芹沢恭太は、まだ深く残っている雪に足をつっ込み突っ込み、子供たちの方へと歩いていく。正確には、子供たちの中に混じっている、外国人の男の方へだ。

男、そして子供たちはそんなことまったく気付かず、自分らで雪を掻き分けた中でボールを蹴って遊んでいる。

その時である。子供たちが蹴り損ねたボールが、高く上がり、恭太の方へと飛んできたのは。

恭太は一步進み胸トラップしようとしたが、完全に落下地点の目測を誤っていた。慌てて足を出す、ボールは明後日の方向に飛んで行ってしまった。

子供たちは、指を差して大笑い。外国人の男まで、両手を叩いておはしやぎだ。

「雪だらけなんだから、しょうがねえだろ」

恭太は苦しい弁明をした。

飛んで行ったボールを取りに行く。危なかった。川のほんの少し手前に落ちていた。ボールは弁償すればいいけど、川に落ちたら多分死ぬからな。たまに雪で埋もれて見えないことあるし。

「ちよつと、わたしたちとゲームしませんか？」

戻ってきた恭太に、外国人の男が声をかけた。

「ゲーム？」

男の日本語はしっかりしており、ゆっくり丁寧で、はつきり聞き取れたが、それでも恭太は聞き返した。発言の意味が分からなかったからだ。

「ストリートファイター2をやるうってわけじゃありません。ファイナルファンタジーでもない」

「ただ日本テレビゲーム通だよ。」

「それで」恭太の持つボールを指差した「あなたたちと、わたしたちとで試合をしましょう」

「子供とおっさんだろ。勝負になんないよ」

「わたしたちの不戦勝！ 勝利ですね！ うおおおお！」

外国人の男は両腕を高く上げ、吠えた。

「外人、うるせえ！ ……じゃあ、あいつらに聞いてくるから」

恭太は雪原に足をつ込み突っ込み、仲間たちの元へと戻った。

「なに話してたんすか」

大道大道が尋ねた。

「試合やらないかって聞かれた」

「あの子らと？ と、おっさんと？」

「うん」

「たまにはそういうのも、面白いんじゃないの？」

と、権三。

恭太は、子供たち、と、おっさんを手招きで呼んだ。

「やろうつてさ。人数似たようなもんだし、メンバーごっちゃにした方がよくない？」

「いえ、あなたたちバースワタしたち子供軍団で」

あんたは子供じゃないだろ。

「本気？ それ」

まあ、いいのか。遊びなんだし。気心知れた者同士でパスしたほうが楽しいか。勝ち負けなんか関係ないし。って、こっちは勝つけどね。

人数の関係で、五対五でやることになった。子供たちの中にGK経験者がいないということでGKは置かず。ゴールネット代わりに引いたラインの、サイドネットにあたる横内側からボールを通せばゴールというルールだ。

みんなで軽く雪を踏み固める。そうしないと、足を踏み出すたびに埋まってしまっても走れないからだ。

本当は、翌日に凍って滑らないように、スコップでしっかり雪を掻ければいいのだが、そんなことしている時間がない。もうすぐ日が暮れてしまい、ささやかなライトがあるとはいえ、子供たちが遊ぶには危険な時間になってしまうから。

即席の、小さな小さなコートに、スターティングメンバーが散らばった。

恭太は外れた。後藤権三、大道大道、長岡巧、宇野井聡太、小笠原慎二の五人だ。

作戦は特にない。

ポジションも、特に決めていない。

あちらは四人の子供と、テレビゲームマニアと思われる外国人の五人。

子供たちは、小学高学年と思われるのが三人、一人は中学年のようだ。

「じゃ、試合開始」

恭太は手を上げ、大きな声を出した。

長岡巧は後ろにボールを戻した。

それを受ける小笠原慎二。

その間に、前へと上がる大道大道。

小笠原慎二は、大道へとパスを出した。

しかし、それは繋がらなかった。

走り込んできた外国人の男が、雪を上手に利用してスライディングしながらカットしたのだ。

器用に、滑りながら立ち上がった。

大道大道がボールを奪おうと足を出す。しかしそれは、空気をつittedただけだった。

ボールは、いつの間にか男の背後にあった。素早く、足で裏に回したのだ。

「ちよつとはやんじゃん」

大道は、ニツと歯を剥き出して粗野な笑みを浮かべた。

「どうも」

男は、大道に背を向けると味方つまり子供へとパスを出す。

「こつちへ！」

男は走りながら、少し前方を指差した。ちよつとだけイントネーションがおかしいが、咄嗟に出る言葉まで綺麗な日本語だ。

その指した場所へ、ボールが来た。

男がボールを受ける。

長岡巧と宇野井聡太の二人で挟み込んだが、男は隙間からすりりと抜け出した。足には、文字通りにボールが吸い付いている。

男はまるで鼻歌でも歌っているかのように、楽しげな顔でドリブルで前進して行く。

ゴールへ独走状態だ。

いや、駆け戻った権三が、男にスライディングをしかけていた。足の間から、ボールを奪った。

そう思ったのは、権三の脳内だけのことだった。

男は、跳躍していた。直前にちゃんと蹴って浮かせていたボールと共に。

空中で、ボールを蹴った。横へ。サイドネットの内側に当てるイメージで。

ライン上は、見事通過したが、

「ああ、今のはゴールじゃないね」

男のセルフジャッジ。

ボールを浮かせ過ぎた。本物のゴールがあつたならば、枠外であつただろう。

「でも、身体があたたまってきましたよ」

男は、にんまりとした笑みを浮かべた。ここにいる誰よりも年長であろうが、だがここにいる誰よりも、子供のような、そんな笑顔であつた。

後藤権三のゴールキックでリスタート。

小笠原慎二がボールを受ける。

慎二に、子供の一人がプレスをかけてくる。

慎二は、ちゃんと横に蹴って軽かわす。そして次の瞬間、自分の足元にボールがないことに気付いた。外国人の男が、慎二の行動を読み、死角からボールを奪ったのだ。

あたたまってきた。そう男はいつていたが、確かに、明らかに開始直後とは動きが違っていた。

まず、キープ力が抜群だ。一人では、とても奪えない。

そして神出鬼没。何故、ここにいるのか、というところに顔を出す。

フィジカルも屈強。激しくぶつかっても、いとも簡単に弾き飛ばされてしまう。

子供への指示が適確。

この男に対してどうしても二人掛かりにならざるを得ないものだから、一人余ることになる子が、男の指示の下うまく立ち回って、とにかくパスが繋がる。

権三、大道、巧、聡太、慎二、みんな息があがってきていた。相手にボールを回され、走らされているためだ。

だがしかし……

外国人の男のほうで、先にペースダウンした。見るからに運動量が落ちてきていた。

腰も痛そうで、プレーの切れ間ごと、両手を当てて押さえている。

「まだまだデース」

自分を鼓舞している。ちょっと、外国人ばいイントネーションが出た。

子供軍団プラスワンは、この外国人が動けなくなったことで、完全に劣勢になった。

そしてついに、大道大道がゴールを決めた。

一分後、小笠原慎二が続いた。

巧、大道、大道、権三、大道、慎二、大道、巧、聡太、ゴールラッシュだ。

「はい、終了！」

時計を見ていた芹沢恭太が叫んだ。

終わってみれば、大人チームの圧勝であった。

みんな、へたばっていた。

十人の、大人、子供、外国人、敵味方が息も絶え絶えにピッチの外へと引き上げてくる。

大勝したというのに、大道や権三たちの表情に明るさは微塵も感じられなかった。

不満、悔しさ、苛立ち、そんな表情であった。

実際、彼らは敗北感到全身を包まれていた。それは、外から見ていた芹沢恭太と木場芳樹も同様であった。

当然だ。相手は四十越えていると思われる中年と、小学生の子供

たちなのだから。

そして自分たちは、 magari なりにも Jリーグ入りを目指しているチームに所属するサッカー選手なのだから。

「あなた、もしかしてコージじゃないか？」

木場芳樹が外国人の男に対して発した質問に、恭太は驚いた。恭太だけではない。権三も、聡太も、みな少なからず驚いているようであった。

この顔、そしてサッカーの上手さ、確かに、そうなのかも知れない。こんな性格だとは知らなかったが。

コージとは、世界的な知名度を誇る、元サッカー選手だ。

ブラジル代表に召集されたこともある。不運も重なって試合に出場したことはないが。

木場にコージではないかと問われたその外国人の男は、目尻に沢山のシワを溜めてニコニコと笑っているばかりであった。

3

家庭料理と酒の店ぶうりん。

後藤権三の経営している店である。

路地裏の一角にあるが、集客力に関しては表通りの店とさして変わりない。一昔前と違って観光客が激減しており、表通りにしても人通りは少なく、この辺りの店は常連客によって支えられているからである。つまり、どれだけ悪い噂の立つことなく長くやってきた古い店であるか、集客はそこに大きく左右されるというわけだ。

権三の曾祖父が戦後に創業した店なのだが、このような店名になった由来は権三も詳しくは知らない。

曾祖父の幼少期のあだ名がプリンであったとか、娘がプリンが好きであったとか、不倫がどうか。現在となってはもう永久に分からないだろう。分かっているのは、店名からヒントを得て権三の妻がメニユーに加えた手作りプリンが、なかなか好評ということだけである。

現在、夜である。

店内は、仕事を終えた中年男性で賑わっている。もちろん女性や、若い男性もいるが、空間のほとんどを占拠しているのがいわゆるオヤジと呼ばれる存在である。

ど真ん中にある大テーブルに、芹沢恭太たちイクシオンACの選手たちが座っている。

テーブルについているのは、練習帰りの芹沢恭太、大道大道、小笠原慎二、木場芳樹、長岡巧、仕事で都合がつかず練習には参加出来なかったが、日野浩一と和歌収^{わかあさむ}。練習に来ていた宇野井聡太は、仕事の都合で先に帰った。

後藤権三はこの店内にはいるにはいるが、嫁にびしばしと働かされていて、この輪に加わるどころではない。彼が店の主人であることを考えると、当然といえば当然であるが。

さて、このテーブルに、もう一人、いる。

外国人の男である。

彼は先ほど雪原で、木場芳樹に、コージではないかと問われた。

そして彼は、コージであることを認めた。

的場耕平と、彼の率いるサッカーチームのために来たのだと。

雪原は寒いし、もう暗くなるし、暖かくて落ち着いて話せる場所を考えたが思いあたるところがなく、うるさいことを承知でこの店に来たのである。

宇野井聡太はコージと飲めないことを残念がっていたが、仕事なので仕方がない。

前述した通り、コージは有名なブラジル人サッカー選手である。本名はとても長いのだが、登録名であるコージがあまりに有名過ぎて、誰もうる覚え程度にも覚えていない。ケイゼンジェウランドなんとかボニールなんとかかんとか寿限無寿限無。

何度も代表に召集されたものの、その都度、合宿などで怪我をしてしまい、代表戦に出場したことが一度もないという不運の選手であった。ただ、国内のリーグでその実力は折り紙つきであった。

ドリブルやシュートといった個人技もさることながら、特に戦術眼に優れていた。

戦術理解度の非常に高い選手であった。

若い頃は所属チームでも、監督から相当に鬱陶しがられていたらしい。練習中でも試合中でも、戦術について口出しをするからだ。

「で、的場さんとは、どんな関係だったの？」

芹沢恭太は尋ねた。一番、大切なところである。

宿屋で初めて会った時には敬語を使ってしまったが、客ではないことが分かったので、すっかりぞんざいな口調だ。

コージは問いかけに答えた。

的場耕平とは、もう三十年近くも昔、お互いに貧しかった頃から知り合いだ。

自分の働いていた農園の、隣の農園の持ち主が的場であったのだ。知り合つて間もなく意気投合し、暇さえあればサッカーの話ばかりしていた。

「知り合いがいるから、とクラブを紹介してくれたのがマトバさんです。また、そこまでの旅費などの費用を出してくれたのもマトバさんです」

それは、間違いなく的場さんだな。恭太は思った。

祖父の持つ農園を手伝いにブラジルに渡った彼であるが、数年と経たないうちに祖父が死去してしまった。すぐに農園を売り飛ばしてしまうことも出来たのだろうか、このままでは引き継いだ者が、そこで働く者が大変である、と、素晴らしい農園を作り上げ、そこで初めて地元の人間に譲り渡して帰国したらしい。

的場自身が誇らしげに語ったわけではないが、聞いた話を総合すると、そういうことだ。

「マトバさんは、地元北海道でサッカーチームの監督をやっていたといってました。おじいちゃんの農園のためにわたしたちの国に来ることになったものの、戻ったらまたそのチームに戻る予定だと、いつてたのです。日本では、プロサッカーリーグを作ろうという動

きがあり、自分のチームを将来は加盟させたい。それが自分の夢である。そんなことをいつていました」

そう。恭太が入った頃にはもう道東ブロックリーグに落ちていたが、以前はJFLの一步手前で、しかもJ準加盟の承認を受けたチームだったのだ。

その後、チームは降格し、また、お金もなく、色々な設備を次々手放すことになり、準加盟の資格は失われてしまったのだが。

「お世話になった人の夢、いつか協力しよう。わたしは思っていました。彼のことを、片時だって忘れたことはなかった。日本語が喋れた方がお手伝いだってはかどります。だから現役の頃だって、毎日、コツコツと日本語の勉強をしていました。キン肉マンのビデオを、字幕の出るところを隠して何回も何回も見ました。それと科学忍者隊ガッチャマンと人造人間キカイダー。キカイダーはかなり面白い。傑作です。漫画版も持っています」

「それで日本にやってきたってわけか」
話が脱線しかけたので、恭太はそれとなく戻してやった。

コージは咳ばらいすると、続けた。

「わたしは現役引退した後、コーチ、そして監督のライセンスを取得し、さらにさらに日本語を勉強して、日本のことも勉強して、そして、この日本にやって来たのです」

「監督になるために来た、ってこと？」

食器を抱えて歩きながら、後藤権三が聞いた。働きながらも、ちよこちよこと聞き耳を立てているのだ。

「そうです」

現在の監督は日野浩一。選手と兼任である。

「おれ反对」

和歌収が頼杖ついたまま、右手を上げた。

「あなたは今日練習に来ていない。発言する資格はない」

コージは立ち上がった。文句があるなら辞めろ、といわんばかりの表情で。

「プロじゃないんだ。みんな仕事持つてて、どうしても離れられなかったりもする。合間をぬって、練習しているんだから」

恭太はなだめた。

「それは分かりますが」

コージの気持ちは分かる。恭太も、同じような気持ちになることがあるからだ。

自分だってたまに、仕事で練習に来ないくせに。

雪の日などにたまたま仕事が忙しくて行かれないと、ちょっとほっとしたりしているくせに。

4

「いい湯でした」

コージは浴衣姿に、タライを抱え、頭には手ぬぐいを載せている。よくそんないい回しを知っているな、と芹沢恭太は思ったが口には出さなかった。また延々とキン肉マンやガッチャマンの魅力を語られても困るからだ。

ここは宿屋せりざわ。恭太の経営している旅館である。

コージは今日来日したばかりで、宿も決めていないとのこと、とりあえずここに泊まって貰うことにしたのだ。

無料でいいというのに頑として聞かず、宿代を受け取った。

「ああ、それ見てた見てた。小学生の頃。懐かしいなあ」
従業員の石館こづえがコージと楽しそうに話している。

「おお、そうですか。わたしは特にバッファローマンが好きですねえ。ヒールな、ミートの身体をバラバラにしちゃった頃の」

結局、ここでも出るのか、その話……

次いでコージは厨房へ遊びに行った。

料理人の片石亨が後片付けをしているのを、強引に手伝わせて貰っている。

日本のこと、北海道のことをしきりに尋ねるコージ。

片石も、相手は宿泊客だからということ関係なく、気さくに応じ

ている。

「ではみなさん、お休みなさい」

やがてコージは、自分の部屋へと戻って行った。

「なんか、変わった人だねえ」

芹沢愛子が、旦那にいった。

「そうだな」

「日本語喋る外国人って、それだけでなんか面白い感じに思えるけど、日本語じゃなくなったら面白いらうねえ。多分」

恭太はフロントに行くと、受話器を取り、電話をかけた。

もう夜の十時半。

でも、多分いるだろう。

呼び出し音が五回ほど鳴り、そして彼は出た。

「ああ、シマさん？ お疲れ様。あのさあ……いやいや、まあ、そうなんだけど。ちょっと違う用でさあ。日野から連絡行つてない？

そつか。まあ聞いてよ」

電話の相手は、田島雄二たしまゆうじという名前で、スポーツクラブイクシオンの社員。要するに、芹沢恭太の所属するサッカーチームであるイクシオンACの、人事や庶務などを担当している者である。

イクシオンACがJリーグ準加盟だった頃は、スポーツクラブを母体とする地域密着のチームを作ろうということで、積極的に投資し、積極的に運営に関わっていた。

だが、長引く不況により実質的に運営撤退。

さらに、チームが降格したことで、現在では単なる胸マークのメインスポンサー程度の存在になっている。チームの存続を考えれば、それでも充分に有難いのだが。

運営から撤退といっても、色々と名前は残されており、スタッフもその社員ばかりなのである。

チーム作りに全く参加してこないくせに、何かをするには彼らの許可が必要なのである。

恭太が電話をかけた理由というのは、コージのことだ。

選手兼任監督の日野浩一は、試合人事以外の全てを面倒臭がつて、おそらく連絡していただろうと思ったが案の定。

自分が連絡する義理でもないかな、とも思ったが、現在なんだか自分が一番コージと深い仲になっているのではないかと思い、親切心から連絡してみたのだ。

話した内容としては、たいしたことはない。

監督希望者が現れた。その事実を報告しただけである。

また、チームに反対論者もいるということ。

5

H市営臨海陸上競技場。

H市の海沿いに建てられた、かなり大きなスタジアムだ。

収容人数22000人。芝生席ではなく、全て、座席である。

周辺地域の住民数やスポーツ人口などを考えると、無駄に大きい規模といえる。

ごく例外的には、座席が埋まることもあるのだが、ほとんどの場合、ガラガラだ。

今日も果たして通常通り。これから試合だというのに、百人も観客がいない。

陸上トラックに囲まれた、芝のフィールド。その中には、これから試合を行う選手たちがいる。

片や、色のついたユニフォームで、

片や、上下とも白だ。

みな、サッカーボールを蹴っている。

そう、これからここで行なわれるのはサッカーの試合である。

現在、試合前のウォーミングアップ途中だ。

「次！」

宇野井聡太郎の合図に、芹沢恭太はボールにゆっくり駆け寄り、蹴った。

ボールは木場芳樹の手をすり抜けるように、ゴールネットに突き

刺さった。

「次！」

大道大道がボールを蹴る。

打ち上げてしまい、クロスバーの上を越えていった。

恭太たち側の着ているのは、ワインレッドのシャツにダークブル
ーのパンツ。

イクシオンACのユニフォームだ。

今日は、道東ブロックリーグの開幕戦。イクシオンACが、ホームで八蘇地^{やそちしんぎん}信銀を迎える。

イクシオンACのホーム開催時に、使う競技場は二つある。

一つはこの、H市営臨海陸上競技場。

それともう一つが、波瀬ヶ丘ひのぼり陸上競技場。

選手たちにとっては、どちらもホームという実感はさほどない。

応援団はどちらも同じような数だし、同じスタジアムを、相手が
ホームとして使うこともあるし。

今回のように相手がセカンドユニフォームを着ていることで、他
人事程度に実感が湧くくらいのものだ。

フィールドと客席とをぐるりと隔てる壁に、選手を鼓舞する様々
な横断幕が張られている。

閃光のドリブラー DAIDO！

粘れ！ ゴン

等等。

女性マネージャーの三宅梓が、両腕にたくさんのボトルを抱えて歩
いている。タッチライン上に、一本つつボトルを置いていく。

場内スピーカーより、男性の声が聞こえてきた。ガリガリとノイ
ズの混じる酷い音質で、選手紹介が始まった。

まずはアウエイ、八蘇地信銀から。

選手名が読み上げられる度、太鼓の音に合わせてゴール裏のサポ
ーターたちが「オイ！」と叫ぶ。

アウエイの洗礼なのか、アナウンスのテンションが異様に低い。

単に読み上げているだけだ。

続いてホーム、イクシオンＡＣの選手紹介だ。

結局、こちらもまったく同様に、テンションが低かった。

「選手の方は、練習時間終了です。引き上げてください」

みな、アナウンスに従い、それぞれの控え室へと戻っていった。

イクシオンＡＣの控え室。

小笠原慎二がドアを開けると、すでに男が一人。椅子に腰をかける。

外国人。

年齢は四十台半ばであろう。目じりに皺は多いが、褐色の肌はまだ若い。座っているが、大柄であることが分かる。痩せているように見えるが、服の中には筋肉がぎっしりと詰まっているのが一目で分かる。

もうお分かりであろうが、コージである。

選手兼任監督である日野浩一が、コージの横に立ち、口を開いた。ドスのきいた声で。

「みんなに、話したいことがある」

と、その時、またドアが開き、控え室に、おかっぱ頭の痩せぎすな男が入ってきた。

年齢、四十少し前といったところだろうか。

イクシオンスポーツクラブの社員である田島雄二だ。

「わたしから話すよ」

そついうと、田島雄二は話し始めた。

「もう顔見知りになっているのもいるようだけど。彼はチーム設立の功労者である故人的場さんの知り合いらしい。名前はコージ。本人から聞いたところでは、ブラジルでサッカー選手をやっていたそうだ」

「おい、シマさんひょっとして、コージのこと知らねえのかよ」

後藤権三は小声で呟いた。しんとした部屋、誰にも聞こえているが、田島雄二はまったく気にした風もない。自分がサッカーを知っ

ている必要性はないからだ。

世界的にその名を知られているコージであるが、彼自信もまったく気にした様子もなく、椅子に座ったままにやにやと楽しげな笑みを浮かべている。

田島雄二は続ける。

「監督になりたいとのことだ。わたしとしては、特に異論はない。いまでも素人が監督なのだし」

日野浩一をちらりと見る。

「資格はちゃんと持ってたんだよ」

日野は面白くなさそうに、自らの角刈り頭を両手で叩いている。コージを指さして、

「あんたさあ、選手としては超一流だったって知ってるけど、監督経験ないんだろ。それに、ブラジルと日本は違うぞ。しかもアマチュアだ。上の世界の理論なんか通じねえんだよ」

「とまあこんな風に、満場一致で新監督を、つてわけにはいかないと思うので、そこで提案なんだが、今日の試合の采配で様子を見ることにしよう。もちろん、まだ彼はチームに登録されていないから記録上は日野君が監督だけど。日野君、文句ないか？ 採点基準は、難しくは考えず、去年のゲーム内容の記憶と比較して、より良いと感じるかどうか」

田島雄二は事務的に淡々とした口調でいった。

「バカ野郎。文句つつーか、監督って普段の練習からチーム作ってくものなんだぞ。おれ、仕事で来られないことも多かったけど、でも、そんないまいきなり来たような奴が、いきなり結果出せるはずないだろ。そんな甘い世界じゃあねえんだよ」

日野は怒鳴った。

「おれ、賛成」

大道大道が、頬杖ついたまま、もう片方の手を上げた。

「そうそう。もしかしたら、劇的に良くなる、という可能性が、なくはない。それが何パーセントかは分からないけど」

長岡巧が続いた。

「去年は、惨憺たる成績だったからねえ。かろうじて残留だったし」
小笠原慎二。本職はホテルの料理人だが、タコよろしく日野を真っ赤に茹で上げてしまった。

「ぶっ殺すぞお前ら！ ふざけたことばかりいいやがって。分かったよ。お前、やってみるよ、監督をよ」

サッカー界の端くれに身を置きながら、世界的一流プレーヤーに対する尊敬もへったくれもない日野であった。まあ、端くれだからこそともいえるのだが。

「はい」

日野の言葉を受け、コージは立ち上がった。

「監督代行をさせてもらうことになったコージです。よろしく。さきほどもでのウォーミングアップで、あなたたちの適正を見させてもらいました。もう申請してしまっただからスタメンは変えられないけど、ちよつとポジションいじらせてもらいますね」

コージは流麗な日本語でそういうと、ホワイトボードに磁石を並べ、メモを見ながら名前を書いていく。

選手たちが驚いたのは、あまりに綺麗な漢字だったというせいではなく、もつと別のところにあった。

「ええ、おれがFWやるの？」

ドレッドヘアだが気の弱そうな（実際に弱い）大城政。入団して四年、去年までずっと、左SBをやっていた選手である。

「にやんだとお！ おれ、ボランチかよ！」

日野浩一。もともと右SHの選手だ。監督兼任であったので、勝手にそこを適正と思ってやり続けていただけだが。

「おいおい、今日の相手は去年一位だぞ。参入戦で、退場などで運悪く負けてまだブロックにいるけど、JFL目指してる強豪だぞ。ポジションには適正以外に慣れつてもんもあるんだし、とにかくいじりゃいいってもんじゃないだろ。テレビゲームじゃあねえんだよ。これじゃ勝てっこねえよ。試合数の少ないリーグだから一試合の重

みがでけえのに、さっそく負け決定かよ」

日野はすっかりお手上げの仕草。

こうまでいわれても、コージの表情に変化はない。

口元にはずっとおだやかな笑みが浮かんでいる。

小皺に埋もれた小さい目は、なんだか無邪気な少年のように輝いている。

「戦術は、とりあえず細かいこといいません。基本に忠実にやって下さい。GKは油断しない。大きくコーチング。DFはしっかり守る。SBは機を見てのオーバーラップ。ボランチは攻守のバランスしっかり取って。日野君の方がちよつと守備的にした方がいいかなFWを含む前目のポジションはどんどん攻める。戦術以上に、なによりも基本に忠実にして欲しいのは、楽しくやりましょう、ということ。それだけです」

コージは締めくくった。

選手たちそれぞれの脳裏には、様々な思いが飛来していた。

単純にいつて、期待と不安、そして興味だ。

日野浩一のように、怒りのみの者もいるが。

開始十分前。

選手たちは、控え室を出た。

対戦相手である八蘇地信銀の選手たちの姿が見えた。

これから、ピッチへの入場である。

両チームの選手たちは肩を並べ、二列になった。

後藤権三は、隣の選手を横目でちらりと見た。八蘇地信銀のFW、森真吾だ

この野郎……去年こいつにつっかけられて、おれ、足を捻挫したんだよな。審判の野郎見てねえから、そのまま持ち込まれてゴール決められちまうし。今回はぜってえぶっ潰すかな。おれはもとからCBだから、コージの奇天烈采配にも混乱はねえし。

「ぶっ潰す！」

野太いガラガラ声で叫んだ。

周囲の選手たちはびつくりし、たじろいだ。

「うるさいよ、ゴン」

芹沢恭太だけが冷静だ。

「それでは、両チーム、選手の入場です」

場内に、バリバリと割れた、質の悪い音声が続いた。

まったく抑揚がない喋り方。DJというより、本当に単なる場内アナウンスだ。いや、それ以下かも知れない。

「まあ、やるだけやろうぜ。最悪、入れ替え戦に勝ちゃいいんだから」

と、恭太がのんびりした口調でいう。

「入れ替え戦なんかすることになったら、みんなでおめえんとこのおんぼろ旅館押しかけて重みでぶっ潰すぞ。つうか、そんなことにはならねえんだよ。今日の結果はどうなるか分かんねえけど、次からまたおれが監督に戻るんだから」

「分かった分かった」

薄暗い通路を抜けると、晴れ渡る青い空。

両ゴール裏に陣取ったサポーターの声援を受け、彼らはピッチへと足を踏み入れていく。

さっきまでここで練習していたというのに、こうして改めてユニフォームを着て、ピッチへと入ると気が引き締まる。例え応援してくれる人が数十人しかいなかろうと。

一人、また一人とピッチへ入っていく。

大道大道 FW

おおみちみち

大城政 FW

秋沼重臣 MF

長岡巧 MF

日野浩一 MF

芹沢恭太 MF

小笠原慎二 DF

滝本孝 DF

後藤権三 DF

橋本英樹 DF

木場芳樹 GK

これが、イクシオンACのスターティングメンバーである。このポジション表記は届けた登録上のもではなく、先ほどコージが決めたものだ。

なお、リザーブメンバーは

FW のまへ 野木基

MF 和歌収

DF 村山伴、宇野井聡太郎

GK 吉田健二

この五人。

両チーム、選手たちがピッチ上に散らばった。

サポーターの声援。太鼓の音が響く。

選手たちはあらためて集まると、肩を組み合い、円陣を作った。
「慣れないポジションだろうと新米監督だろうと、試合が始まりやあ関係ねえ。死ぬ気でいくぞ。勝つぞ！」

日野浩一は間近に揃ったみんなの顔に目をやると、そう叫んだ。
「おう！」

北の大地、広がる青い空の下、声が響いた。

6

芹沢恭太はドリブルでライン際を駆け上がった。

ゴール前へと、大道大道が走っていくのが見える。

恭太は、相手DFをフェイントでかわした。

ここで、クロスだ。

しかし、せっかく自由な状態であったというのに、慣れておらず焦ってしまったためか、目茶苦茶な方向へボールを蹴ってしまった。アーリークロスを上げるべきところだが、アーリーどころか少し

も角度を変えることが出来ず、真っ直ぐゴールラインへと蹴り出してしまったのだ。

「キヨンさん！ ドンマイドンマイ！」

大道が、意味不明な大袈裟なゼスチャー、馬鹿でかい声を張り上げて恭太を励ましている。

励まされたところで、もともと気落ちなんかしていない。クロスを上げることなんか、慣れていないからだ。

八蘇地信銀のGK、棚田裕也のゴールキック。

助走を付け、蹴った。

ハーフラインを越え、一気にイクシオンACの最終ラインにまで飛んだ。

競り合う後藤権三と、八蘇地信銀のFW森真吾。

権三の方が十センチ近く背が高い。

良い位置を占めたのは森真吾であつたが、権三は身長差を活かして、軽く跳躍すると頭で跳ね返した。

去年は、このFWに怪我させられるわ、審判がラフプレーを見逃したおかげで失点してしまうわ、散々な目にあつた権三であるが、現在のところミスすることなく冷静に、しっかりと守ることが出来ている。

こぼれたボールを、ボランチの日野浩一が拾った。

詰め寄られる前に、長岡へとパスだ。

日野はいま、なんと表現していいのか分からない気分を味わっていた。

おそらく、自分だけではない。

この、くすぐったいような気持ち。

長岡は、MFの松木安二郎をかわすとクロスを上げる。

いや、松木のかろうじて伸ばした足に邪魔され、ボールを空高く打ち上げてしまった。しげおみ

ボランチの秋沼重臣と八蘇地信銀の小柴潤一郎が、落下地点目指して走る。

秋沼が一步早かった。

前線へ、大きく蹴った。

雄叫びを上げながら、大道大道が走る。

ボールの落下地点へ。

DFの茂木勝と、競争になった。

大道大道が先に追いつきそうだった。

GKの棚田裕也たなだゆうやが飛び出してきた。そして、身体を横に倒しながら、滑った。

大道は、背後からの足音に反応し、ボールを真横へと転がしていた。

やはり、走りこんできていたのは大城政であつた。

右足を振りぬいた。大城のトレードマークであるドレッドヘアが、ぶつわと持ち上がった。

宇宙開発。ラグビーのゴールキックのような角度で、クロスバーの遥か上空を飛んでいってしまった。

「ああもう、決めるよマサ！……でもまあ、走りこんでくるタイミング、すげーよかった。ひょっとして向いてんじゃない、そのポジション」

大道の口調は荒っぽく、文句をいつているのか褒めているのか分からない。

後ろから、いまのシュートに到るまでの一連の流れを見ていた日野浩一は、身体が震えていた。

先ほどから感じていた、むず痒いものの正体が分かってきたのだ。これが、監督の力量ってやつなのか。

ベンチで腕を組んで座っているコージを見る。

でも、ポジションいじっただけで、それだけで、なんもしてないよな。あいつ。

でも……

パス、回せてる。

奪えてる。

決定機も作れてる。

去年、ドン引きで守るのに精一杯でなにも出来なかった相手に、
だ。

向こうさん、選手ほとんど去年のままだぞ。

オフの間に、うちの個人技がそれほど上がったってのか？

そんなはずないだろ。

仕事をいいわけに、みんなだらだらやってたんだから。

じゃあ、やつぱり……

この感覚、おれだけじゃないよな。

おれだけじゃ。

ほら、みんなの顔。

手ごたえ掴みかけていることに、驚いている。

もっと試したいと思っている。

そんな顔、してやがる。

どういつもこいつも。

少なくとも、負けるかも知れないなんて、これっぽっちも思っていない顔だ。

誰だよ、こんなんじゃないやちぐはぐになってボロ負けするなんていつてた奴は。

「やつぞごおらああ！」

日野浩一は、まるで熊のような雄叫びを上げた。

「サッカーは小学生の頃から二十年以上やってんだ。ボランチなんて知りませーんなんてガキみたいなこといつてる暇はねえんだよ、この野郎！」

「誰に叫んでんだよ、バカ」

芹沢恭太が冷静に突っ込みを入れる。恭太自身も、他の者同様にかなりハイになっているのだが、日野浩一と比べると落ち着いて見えてしまうだけだ。

「自分にだよ」

二人は顔を見合わせると、どちらからともなくニツと笑った。

八蘇地信銀、棚田裕也のゴールキック。

風に乗り、遠くまで飛んだ。

C Bの橋本英樹は、迫ってくる相手FWにちらりと視線をやると、落ち着いてヘディングで日野浩一へと繋いだ。

日野から、さらに頭で恭太へ。

恭太は足で、丁寧に受けた。

八蘇地信銀の松木安二郎が立ち塞がった。

恭太は、抜く素振りを見せ、ボールを横に転がした。

駆け上がってきていた右SBの小笠原慎二が拾い、速度を落とさずドリブルに入った。オーバーラップだ。

左サイドのFWやMFが上がっているのを確認すると、小笠原はゴールライン遠目から、いわゆるアーリークロスを上げた。

だが精度悪く、相手ボランチに拾われてしまった。

イクシオンACの選手は、かなり人数を割いて攻め上がっていた。となれば、ボールを奪った八蘇地信銀としては取るべき手段は一つ。

カウンターだ。

ほとんどの選手が一斉に、さながら津波のような勢いで駆け上がっていく。

イクシオンACで残っているのは、GK以外はCBの後藤権三と橋本英樹の二人だけだった。

津波に飲み込まれそうになる焦りから、権三に、ラインコントロールのミスが出た。

八蘇地信銀、小柴潤一郎から前線へのグラウンダーのパス。

オフサイドぎりぎりのタイミングで飛び出した森真吾へと渡った。権三たちは完全に遅れていた。

森真吾は芝の海を独走する。

GK木場芳樹と一対一になった。

勢いを抑えてコースを狙った、森真吾のシュート。完全に枠を捉えている。

木場は横つ飛びで、かろうじて手の先に当てた。

ボールはゴールラインを割り、八蘇地信銀にＣＫが与えられた。
「ナイスプレー、フアング」

橋本英樹が手を叩いた。

フアングというのは木場のニックネームである。木場 牙、ということらしい。

イクシオンＡＣのゴール前に、両チームの選手たちが集まり、ひしめき合った。

キッカーは、ＭＦの松木安二郎だ。

審判の笛が鳴った。

短く助走し、蹴った。

ボールは大きな山を描いて、ファアへと飛んだ。

八蘇地信銀のＤＦ茂木勝が、後藤権三と空中戦を競り合い、競り勝ち、ボールを折り返した。木場の手のうえを、通り越していく。

ゴール前中央で、マークをかわしてするりと抜け出した森真吾が、頭を上手く合わせた。

木場はゴールネットが揺れるのを、黙って見ていることしか出来なかった。

森真吾のゴールが決まり、八蘇地信銀が先制した。

ドンドンドンドンドン。

太鼓の音、そして観客席からはまばらな拍手。

地面を踏みつけ、悔しがる権三。

セツトプレー時のマークは担当ではないが、奴に決められたことが腹立たしい。

腹立たしくはあるが、先制されたことへの焦りはない。

去年ギリギリ残留したチームである、失点などは悪友のようなものだからだ。

権三だけではない。チームの誰もが、気落ちすることなく、動きの質の落ちることもなく、攻め続け、そして、守り続けた。

長い笛が鳴った。

前半戦終了。

ハーフタイムだ。

引き上げてくる選手たちを、コージが出迎えた。

口元には、笑みが浮かんでいる。

「楽しそうだな」

日野浩一は、あえてぶっきらぼうな表情を浮かべた。

「はい。いままでどうだったのか、それは知りませんが、あなたたちが楽しそうにプレーしているのを見て、ワクワクした気持ちでボールを蹴っているのを見て、わたしもとても楽しいのです」

邪気のない、実に清々しい顔。

確かに、いままでにないワクワク感があつた。芹沢恭太は思った。恭太だけではない。先ほどまでピッチを駆け巡っていた選手たちは、改めて前半戦の内容、自分達のプレーを回想していた。

強豪である八蘇地信銀相手に最小点差である一点ビハインドでの折り返し、それは去年にだってあつた（後半にボコボコにされてしまったが）。しかし現在、その時に感じたものとは比較にならないくらいに、選手たちの気分は高揚していた。

「頼む！ どうすれば、おれたちは勝てる。具体的な戦術の指示を聞かせてくれ！ お願いだ」

日野浩一が怒つたような顔で、怒っているような大声で、深く頭を下げた。

「では、話しましょう。みんなで、勝利を掴みましょう。ジークジオン」

最後の一言は意味不明だが、とにかくコージは優しい笑みを浮かべると、踵をかえし、ゆっくりと控え室の方へと歩き出した。

控え室には女子マネージャの三宅梓がいて、選手たちにタオルを渡してくれた。

コージはホワイトボードに向かうと、マーカーを手に取った。

ホワイトボードには、選手を示すのに使う赤い磁石と青い磁石が沢山張り付いている。コージは磁石を動かしてはマーカーで矢印を

書き、戦術について丁寧に説明をしていく。

特別に奇抜なことは、なにもいつていない。

選手たちは、小学生くらいからずっとサッカーをやっているが、そうした中でいくらでも聞いたことがある一般的な戦術論であった。

ポジションを変えただけで起こった前半戦の魔術、これがなければ聞く耳を持たない者もいたかも知れない。

だがいま、ここにいる選手たちはみな、真剣であった。

強くなりたい。

負けたくない。

勝ちたい。

大物を食いたい。

誰もが当然に思う欲求。

だが、かなえるには才能が必要だし、欲求に見合う努力も必要だ。他にかける時間をほとんど投げ出さなくてはならない。

これまで、それをやってきたといえるか。

やっていない。

努力して、全てを投げ出すことで、要求がかなう保障がないからだ。

高校、大学と、若い頃はガムシヤラに頑張ってきた。

だから、こうしたＪリーグを目指すチームから声がかかり、入れたのだろうし。

だが現在は、自分で働いて、金を稼がなければ生きていけない。

家族のいる者も多い。

すべてを投げ出すという、バクチが出来ない。

サッカーは好きだが、全てを投げ打つてのめり込むわけにいかないジレンマ。

そう。サッカーが嫌いなわけではない。

大好きだ。

だから、勝ちたい。

勝てない。

勝ちに飢えている。

そして、いまここに、勝つチャンスがある。

勝つチャンスが……

「以上です」

コージは、マーカーを置いた。

もうすぐに、ハーフタイム終了だ。

「勝つぞ！」

日野浩一は叫んだ。

控え室の出口の壁を、通り様に思い切り叩いていた。

続く後藤権三も、同様に壁を叩いた。

やんないといかんのかな、と芹沢恭太も叩いて、控え室を出た。

恭太の背後ではさらに、バン、バン、と続いていく。

外へ出ると、すでに八蘇地信銀の選手たちは円陣を組んでいると

ころだった。

遅れ、イクシオンACの選手たちも円陣を組んだ。

顔を寄せ合った。

みんな、なんだか自信に満ちた表情。

ぎゅっと、肩に力を込めた。

「逆転するぞ！」

日野浩一の叫びに、みんなが応えた。

選手たちは、ピッチ上に散らばった。

イクシオンACは、ハーフタイムで選手が二人、入れ替わった。

OUT 滝本孝、秋沼重臣

IN 村山伴、和歌収

それぞれ同じポジションでの交替、和歌収はドイスボランチの左、

村山伴は左SBに入った。

前半にそれほど左が破られていたわけではない。

これが、コージの考えたベストメンバーというだけのことだ。スターティングメンバーは、既に日野浩一選手兼任監督が決めて提出

してしまっていたので変えられなかったからだ。

両チーム、エンドを変え、そして後半戦開始の笛が鳴った。

八蘇地信銀のキックオフだ。

森真吾はボールを後ろに蹴った。

そこへ、大道大道が全速力で突っ込んで行く。

それが功を奏したのか、小柴潤一郎はミスパスでタッチラインを割ってしまう。

イクシオンACのスローイン、小笠原が投げた。

芹沢恭太が受ける。背後に松本安二郎が張り付いたが、恭太はタインしつつ、軽いフェイントで上手くかわした。

そのまま、ライン際を駆け上がる。

スピードに乗ったドリブル、恭太の一番の特徴だ。もう三十歳だが、中学生の頃は陸上部とかけもちしたほどの俊足とスタミナ、まだ衰えてはいない。

八蘇地信銀のDF茂木勝とマッチアップ。

恭太は、サイド側を抜く振りをして、かわす。内側へと切り込んでいく。

前線へと、グラウンダーのパスを送った。

ボールは、相手のDFとDFとの間を上手くすり抜けた。

オフサイドラインぎりぎりのところから、大道大道が飛び出していった。

ボールを受けた。

副審の旗は上がっていない。

そのまま全力疾走で、ゴールへと向かう。俊足、というほど俊足ではないが、とにかくガムシヤラに走るのが大道の特徴だ。勢いがあるものだから、実際の速さ以上に速く感じられることがあり、相手DFから嫌がられることも多い。俊足というより快足だな、といわれたことがあるが、本人は全く意味は理解していない。もう一つ特徴を挙げるなら、ガムシヤラすぎて後半途中から目に見えて運動量の落ちてしまうこと。まだ後半戦も始まったばかりなので大丈夫

そうだが。

快足を見せる大道の前には、ゴールがあるのみ。GKの棚田裕也がいるのみだ。

PA内に侵入した。

その瞬間、棚田裕也が飛び出してきた。シュートを全身でブロックしようと、身体を横に倒す。

大道は、それを冷静にかわすと、冷静にボールを流し込んでいた。そつと、ゴールネットが揺れた。

同点ゴール。大道は、右手を高く突き上げた。サポーターの叩く、激しい太鼓の音が響いた。

後半開始早々に追いついたイクシオンACであるが、それは、決して偶然ではなかった。

その後も、主導権を握り続けたのである。

とにかくボールが回る。

味方を、ボールを、結果を信じて、走る。攻める。

取られても、すぐに奪い返す。

八蘇地信銀はすっかり防戦一方になっていた。

「去年と変わってねえつてのに」

八蘇地信銀のDF茂木勝が、セットプレーで上がる際、日野浩一とすれ違う際に発した言葉である。

去年のリーグ戦では、八蘇地信銀が圧倒的大差での二戦二勝。お互いに選手がほとんど変わっていないというのに、圧倒出来ないどころかこうまで押されるその不思議さ理不尽さ。

「ノッてっからに決まっつてんだろ」

日野浩一が野太い笑みを浮かべた。

八蘇地信銀のCKは山なりでファーへ。長身DFの茂木勝が待ち構えていたが、木場がなんとか手に当て、弾いた。

そのこぼれを松木安二郎に打ち込まれたが、バチンと凄まじい音で権三が顔面ブロック、ゴールは割らせない。

権三から気合の入ったボールを受けた日野浩一。駆け上がる。カウターだ。

だが相手は守備にも人数を割いており、速攻を巧みに遅らせる。なら普通に攻めりやいいんだ。どっちにしろうちが押してんだから。日野からボールを受けた芹沢恭太は、小柴潤一郎と勝負する素振りをみせつつ、セオリー通りに駆け上がってきたS Bの小笠原にヒールで渡した。小笠原はそのままオーバーラップ。恭太も全力で中央へ、ゴール前へと走っていく。

コーナーまで上がった小笠原は、松田俊介をかわすと、クロスを上げた。

ボレーの大城と茂木勝が競り合う。

茂木の方が遥かに長身であるが、大城は巧みに身体を入れて、ボール落下地点を背中で死守。

と、身体を反転させ、飛んできたボールに合わせ、右足一閃ボレーシュート。

G Kの棚田裕也が弾く。

そこへ飛び込んできていたのが芹沢恭太。ダイビングヘッド。ボールに、頭を叩きつけた。

G Kはまったく反応出来ていない。

決定的なシーンであったが、結果としては虚しくバーを直撃しただけであった。

こぼれたボールは、茂木勝が大きくクリアした。

それを拾った和歌収は、前線の大道へと大きなパスを送った。

胸トラップしたところ、相手の茂木勝と松田俊介とに囲まれ、奪われそうになるが、フォローに入った大城政にボールを預けて突破に成功。

大道と大城、今日が初めてと思えない息の合ったツートップで、ぐいぐいと八蘇地信銀の陣地を突き進んでいく。

ボランチの選手のスライディングを受け、大道は転ばされ、ボールを奪われてしまった。ファールをとってもらえなかったことに激

怒するが、すぐにプレーに戻る。

時間が経過していく。

もうそろそろ、後半ロスタイムだ。

芹沢恭太の足は、攣り始めていた。走り過ぎたのだ。

近くにいる日野浩一も、慣れないボランチで、守備に走らされたり、気分イケイケで無駄走りして攻めあがったりで、やはり足が攣りかけているようだ。

勝ち慣れていないのだから、仕方がない。現在同点であり、勝ちでもなんでもないが、この押している状況に、イクシオンACの選手たちは、目前にぶら下がっている勝利という果実をあとほどに掴み取るだけと、そういう気持ちでいるのは間違いなかった。

恭太は、振り返る。DFの後藤権三も、遠目からでも肩で息をしているのが分かる。あのバカ、タバコなんか吸っているからだ。

選手たちの疲労から、パスがかみ合わなくなってきた。

受け手が、走っているつもりでも、走っていないのだ。

時間の経過とともに、みな、走れなくなっていることを自覚してきた。

しかし気持ちは、誰一人として切れてはいなかった。

勝てる。

そう信じて、走り続けた。

相手だって辛いのだ。

だから実際、押し込んでいるじゃないか。

強豪相手に勝ち点1を取ればいいじゃないか。そう思っている者は誰一人いなかった。

必ず、勝ち点3を取る。

今日は、勝てる。

おれたちは、やれる。

一点取ればいい。

それだけで、勝てるのだ。

「まだ走れっぞ、おれは！ うっらああ！」

日野浩一が獣のような声で叫んだ。

その叫びが終わるか終わらないかのうちであった。劣勢であった八蘇地信銀のカウンター、そして、森真吾がゴールを決めた。

サポーターの歓声、拍手、太鼓の音。

主審が、長い笛を鳴らした。

試合終了。

イクシオンACは、あと少しというところで、勝ち点1も3も失った。

芹沢恭太は、ふらふらと何歩か進むと、地面に腰を下ろし、そして仰向けに寝転がった。

大の字になった。

晴れた青空を見上げた。白い雲を見上げた。すべてが、あの雲のように流れてしまった。

でも……

勝てそうな、試合だった。

勝てた試合だった。

だけどあまり、いや全然、悔しくない。

奇妙な充足感、とでもいうのだろうか。そうしたもので、心も身体も一杯だ。

上体を起こした。

鏡がないので自分の顔は分からないが、もし想像通りなら、日野や、大道らと、同じ顔をしているのだろうか。

恭太は、ゆっくりと立ち上がった。

みな、中央に集まると、列を作り、お互いに相手チームと握手をかわした。

八蘇地信銀の選手たちが引き上げた後も、恭太らはまだピッチの上にいる。

この芝の感触をもう少し味わっていたい。

ただ、それだけであった。

みんな、同じ絵を描くことが出来た、芝という、このキャンバ

スの上で。

「お前らのさ、ツートップ、結構しつくりきてたじゃねえか」

日野浩一が、大道大道と大城政の二人の裾を掴んで引き寄せ、二人の背中を思い切り叩いた。日野は睨んでいるような目つきだが、その口元には笑みが浮かんでいる。

「そうすか。大道大城、大大ってことで、オレンジツートップって呼んでいいすよ」

すっかり得意になっている大道。なんどもチャンスを作ったあの気持ちよさが、まだ抜けていない。まだ自信たっぷりな精神状態なのだ。

「センスねえよ、バカ」

日野は、大道の頭にぐりぐりとげんこを押し付けた。

「いててて！ 禿げる！ 禿げる！」

もがく大道。

「みんな、お疲れさまあ」

男ばかりの汗臭い雰囲気似合わぬ甲高い声が響いた。

マネージャの三宅梓が、タオルを抱えて近づいてくる。コージ監督代行と、田島雄二も一緒だ。

「それで、どうでしたか？ わたしにサッカーは分かりません。みなさんで決めてください」

田島雄二の粘液質な声。チーム母体の社員とは思えない台詞。なげやりなわけではなく、彼は彼なりに、このチームや選手たちに愛着があり、その裏返しであった。

「シマさん。おれ、いいと思う」

日野はコージへと歩み寄ると、両手を取りぎゅっと握った。

「つつか、もうこの人しか考えらんねえ。おれなんかクソだクソ。根性だったら誰にも負けねえけど、頭悪いからよ、だから、おれなんか監督兼任させてたのが、そもそもおかしい話だったっつーんだよ」

「お前がシマさんに、監督やらせてくれって、がんとして譲らなか

「つたんだろつがよ」

後藤権三は、呆れ顔で日野のほつぺたを突付いた。

「えー、コウイチちゃん覚えてなーい」

日野は、ゴリラのような顔を歪めて女子高生のような口調。不気味であつた。

「じゃあ、決まりですかね。後で、必要書類を渡しますから。あ、あと、大事なことを伝えてませんでした。うちは完全アマチュア。いまのとこね。だから、お給料は一切払えないから。職の斡旋はするけど。うちのスポーツクラブでもいいし」

田島雄二は、さらさらと事務的にいつてのけた。聞くものが聞けば震え上がりそうな、世界のコージに対し実に恐れ多い態度なのだが、田島はサッカーにさして興味はないし、他人から彼は世界的に有名な選手だといわれても、興味のない分野でのことなので、さしたる感銘も受けなかった。

「いいりません。貯金は充分にあります。お給料のかわりに、わたしはこの日本で、このチームで、勝手に色々なものを貰っていきますから。お給料以上のものを持っていくつもりですが、文句はいわないでくださいな」

そういつと、コージは柔らかく目を細めた。

「泥棒かよ。遮断機や信号の部品持つてつたりすんなよ」

後藤権三がぼそりと呟いた。

「わたし心のこといつてます！日本人、言葉の裏を読める文化じゃないんですか！貯金は充分にあるっていつてるじゃないですか！」

なにをいわれても温厚な態度を崩すことのなかったコージが、なにが引つかかったのかいきなり顔を真っ赤にして怒鳴り出した。

しかし、すぐ我に返り、誤魔化すように咳払いをした。

「ではあらためまして。このチームの監督をやることになったコージです。練習、とても厳しいですよ。普段の仕事で練習に来られないのはしかたないですが、その時は自宅で出来るメニューをやつて

貰いますし、帰宅が深夜だろうと走りこみはやって貰います。みんな、強くなりましょう」

コージはしめたつもりであったが、全員、返事がばらばらであった。

ぴしっとするのが苦手な連中ばかりなのだ。

「ちゃんとしろよ、おめーら！」

日野浩一が怒鳴る。

「お前だろ、なにがウオオイだよ。気だるい返事しやがって」

権三が、人差し指で思い切り脇腹を突付いた。

コージは相変わらずと喋っている、いつもの笑みを浮かべている。少し違ふとすれば、より目を細めているということだろうか。満足げ、とでもいえないだろうか。

選手たちの表情の奥にあるもの。その変化。

それが、コージを満足させたものであった。

すでに夕刻。

バックスタンドの向こうに、大きな太陽が沈みかけている。

芝生の上には、選手たちの影がどこまでも伸びていた。

第二章 相对彼氏

1

今日も宿屋せりざわの朝は早い。

職種が職種、当然といえば当然ではあるが、まだ日の出る前だといふのに、もうみんなであくせくと狭い旅館を行ったり来たり賑やかに働いている。

「どうも、おはようございます、社長」

男性従業員の岩寺蛇夫が、自分の頭髪のような、薄汚れて白黒混じったモップを両手にせつせと廊下を掃除していたが、社長、つまり芹沢恭太に気付くと曲がりかけた腰を頑張っぴんと伸ばし、声をかけた。

「あ、おはよう岩さん」

いきなりシャチャョーなどと立派な呼ばれ方をされて、一瞬目が覚めかけた恭太であったが、威厳をとりつくろっておくかどうかを迷っているうちに、すぐにまた眠たそうな表情に戻ってしまい、そのままもったりよたよたと歩いていった。

壁に頭ぶつけた。

ほんのちよつとだけ眠気が覚めた。

前日に特殊なことがあったわけでもなく、本日特殊なことがあるわけでもなく、この時間の恭太はいつもこんな、単に凄まじく寝起きが悪いだけである。

「阿比留さん、そこもう全部盛り付けちゃっていいから」

「はい」

厨房の前を通りかかると、料理人の片石亨と中居の阿比留真弓の声。宿泊客の朝食を作っているのだ。阿比留さんは、皿を出したり盛ったりのお手伝いをしているようだ。

「おう、旦那さん、おはようございます」

裏口が開き、富居新平が入ってきた。

「ああ、おはよう。今日もご苦労さん」

恭太は眠たそうな目をこすった。でも、さらにほんのちよつとだけ眠気が覚めた。

富居新平はここからさほど遠くないところに自分の和食料理店を構えている。彼の父親の始めた店で、興す前にこの旅館で二十年ほど働いていたという縁で、日によって空いている時間を利用して手伝いに来てくれるのだ。とはいってもちゃんとした仕事の契約であり、お金も払っている。

「あ、旦那さん、おはようございますう」

中居の一人、石館こづえが、二階廊下のカーテンを開け終えて、階段を下りてきた。

「突き当たりのカーテンレール、錆びと歪みでギシギシ引っ掛かって、寿命みたいですねえ。あつ、そういえば、すっかり春ですぬって思ったこと、通気孔のところで冬籠りしてたコウモリ、いつの間にかいなくなっちゃいましたよ。ちゃんと飛び立てたんですかね。まあ外に落ちてなかったから大丈夫だったんでしょうけど。そうそう、旦那さん、来週ねえ、うちの息子がねえ」

いつものことではあるが、まあ、ぺらぺらぺらうるさいうるさい。仕事上の話から始まったはずなのに、恭太が一言たりとも返さないうちに、どうでもいい話に発展してしまっている。

さすが今日の発言が明日には北海道全域に伝わっていると仲居仲間にかかわれているだけある。

「石館さん、終わった？ それじゃ、また頼みたいことがあるんだけど」

女将さん、つまり恭太の妻である愛子がやってきて、あれやこれやと指示を始めた。

「ああ、なるほどですね。分っかりしたあ」

と、石館こづえは跳ねるような足取りでまた二階へと戻っていった。

「さてと、阿比留さんは厨房はもういいかな。部屋の掃除してもら

わないと。そうだ、恭ちゃん、あとで幸善屋にお布団取りに行つてきてよ、お昼まででいいから。それで、出来れば帰りに……恭ちゃん！　ぴしつとする、ぴしつと！　旅館のご主人様が、そんな眠たそうな溶けたような顔して頭ふらふらさせてんじゃないの！　朝早いったつて、お客さんとすれ違うことだってあるんだからね。というか、働いてるみんなにも示しつかないでしょう」

「ふああああい」

と欠伸を噛み殺そうと自分と格闘しながら、フロントに設置されたコンピュータのところへ向かい、椅子に座った。

「今日は確かあ、団体さんが来るんだよな」

いま愛子に布団のことをいわれて思い出した。

ぎこちない頼りない手つきでキーボードを叩く。

どこからのどんな客だっけ。何名だっけ。

あ……

「やべ、全部消えちまった！」

画面に顧客データが表示されたかと思うと、突然文字が消え、真ん中に、登録無しの四文字がポップアップ。

「ここを選んで、こうだよ。消えてない」

愛子はキーを二つ三つ叩くと、画面に再び顧客データが表示された。

「おっけえい」

安堵の溜息。GKナイスセーブ。

「おっけいじゃないよ、いい加減覚えなよ」

「そのうちにな」

何年か前までは、よくぞこんなものがこのインターネットの時代に、というようなグリーンモニターで操作する端末だったのだ。ようやくにして覚えかけたというところで、祖母が、データセンターとやりとりするからうちにホストコンピュータはいらない、などとさっぱりわけの分からないとんちんかんちん一休さんなことをいい出して、ウィンドウズの端末を新規導入したため、これまでの操作

経験やシステム理解の知識がリセットされてしまい、もうさっぱり分からず、覚える気にもなれない。

「いい湯でした。ほんまにー」

外国人の男、コージがやってきた。朝風呂を浴びていたのか浴衣姿で風呂桶を持って、頭には手ぬぐいを乗せている。いまにもドリフの歌でも歌い出しそうな雰囲気だ。

「ピンボールはないんですか？」

「ないよ」

どこの山奥の温泉宿だよ。近所にストリップ劇場もねえぞ。

さて、一時間、二時間と時も過ぎた。

従業員にとって毎日の仕事はほぼルーチンワークといえる決まりきった流れ作業で、まあ色々と例外もあるものの、大半は愛子が指示を出すか自分でやってしまう。経理も先代女将、つまり恭太の祖母がやっている。なにがいたいとかというと、つまり恭太の普段の仕事はそれほど多くはないということ。とりあえずこの主人として、責任者として、一通り形だけは仕事をしているうちに完全に目も覚めてきて、幸善屋から布団を取って戻って来ると、休憩時間と称してサッカーボールを手に中庭に出、リフティングを開始した。

右の爪先、右の爪先、左の爪先、左腿、頭、胸を転がして左の爪先、右の爪先。

下駄で器用に蹴り上げる。

大道芸でやるようなブレイクダンスさながらのアクロバティックな真似などは到底出来ないが、この地味な調子で百回程度ならば落とさずに続けることが出来る。

筋肉が温まってきたところで、地面に赤いカラーコーンを並べていく。

軽く柔軟。

まずはボールを蹴らずに身体だけ、ラダートレーニングのように細かく腿上げをしながら、コーンの間をジグザグに抜ける。

今度は身体の向きは変えずに、そのまま反対方向へ。

それを何度か繰り返した後は、ボールを使って、同じコースをドリブルで抜ける練習。

「おお、キヨン君。やってますね。わたしも混ぜて下さい。風呂入ってしまっただけ入り直すから」

コージが、まだ浴衣姿のままで中庭に入ってきた。

「いいけど、キヨンに君を付けるのはやめてくれや」

恭太はチーム内で、タメ口きくような仲の相手には下の名前をそのまま呼ばれ、目下にはキヨンさんと呼ばれている。どちらも慣れるまでもなくしつくりくるものがあるが、キヨンと君の組み合わせは違和感凄まじい。

さて、コーンを並べ変えて三畳ほどの小さな小さな競技場を作ると、二人はボールの奪い合いを開始した。

ボールを持っているのは恭太の方。

まずはコージがどう出るかをじっくり窺うつもりであつたが、動いたと恭太が認識した瞬間には、すでにボールを奪われていた。そんな速い動きには見えなかったのに。いや、むしろ、すうっとゆっくり歩み出したかのように見えたのに。

まるで手品を見せられたかのようにうだ。

奪われた以上は奪い返す。恭太は気を取り直した。

しかし、奪取の能力だけではなく、保持能力の高さも半端ではなく、まったく奪えない。

背を向けてボールを守っているわけではなく、ずっと恭太に対して正面を向いたままだというのに。

仁王立ちになって、ただ単に足で右に左にとボールを動かしているだけだというのに。

それなのに、奪い取るどころかボールにかすることすらも出来ない。

やっぱりこの人、すげえ。本当に、上手だ。

さすがブラジル代表に選ばれただけある。この技術力には、もう舌をまくしかない。

浴衣姿のまま、というのが、舐められてるようでちょっとムカつくけど（といつつ自分も下駄だが）。

本当に、技術力は神懸かっているほどに素晴らしいが、だがしかし……

「まだまだです」

などと負けん気を吐きながらも、コージは地面に膝を付き両手を付き、へたばってしまった。

「あのさあ、引退して、四十過ぎてるからって、その体力のなさは異常じゃねえのか。六十過ぎたシニアサッカーのじいちゃんだって、もつと走るぞ」

「いえ、暇さえあれば日本語の勉強していたので」

キン肉マンのビデオで。

しかも動かないと太る体質なものだから、とにかく食事を抑えていた。だからすっかり筋力もスタミナも落ちてしまったというわけだ。

「もう充分だよ。そんだけ喋れりゃ。じゃあさ、一緒に走り込みしようや。しばらく泊まる気だっつーんなら」

「そうしましょうか」

恭太たちの所属するサッカークラブ、イクシオンACの監督になることが正式決定したコージであるが、その後も住居を探すつもりが毛頭ないのか、この恭太の宿屋に客として泊まり続けているのである。

「おい、あれコージじゃねえの？」

窓から、若い男。さらに奥からもう一人の男が顔を覗かせた。

「はい、コージです。本物です。へらんちよカーニバルの五島洋司のモノマネじゃありませんよ。ぜひイクシオンACの試合を観にきてくださーい」

彼らにぶんぶんと両手を振った。

「なに宣伝してんだよ、まったく」

それよりなんでへらんちよカーニバルなんかを知ってたんだよ。

「いつか」に上がるんじゃないんですか。お客さんに来てもらうさ
さやかな努力を惜しんでどうしますか。どうせチームが上がっても
自分じゃ「リーガー」にはなれないって思っているでしょう。所詮地
域リーグ、底辺、光ってない、輝いてない。まさか、そう思ってい
ませんか」

「そこまでは思っていないし、思ったとしてそのなにか悪い。そ
こまで自信持てる実力があれば、とつくにどっかでプロになってる
っつーの」

アマチュアの気持ちも理解しろってんだ。

二人は練習を引き上げ、中に入った。

と、恭太の背筋が凍った。

「いらつしゃいませえ」

みんなの声が聞こえてくる。

玄関から、そろそろと、客が入って来る。

そうだ、今日は珍しく、団体客が来る日なんだった。

恭太は下駄を脱ぎ、靴に履き替え、そそくさと走って、迎える列
に並ぼうとした。

「イラシャイマセー」

とコージが浴衣姿で列の中。

「ちよっとお客様あ、こちらへ」

恭太はコージの耳を引つ張り、ぐいぐいと奥へ連れていく。

「たいっせつな団体客様なんだよ！ 北海道の偉い人らしいんだよ
！ つうかなんであんなの方が先に並んでんだよ！ つうか並ぶな
よ！」

恭太は叱った。自分も危うく顧客データ消去するところだったく
せに。

2

がつ、と激しく肩と肩がぶつかりあった。

日野浩一は、ずんぐりむっくり低重心の小熊のような体型を活か

し、バランスを失うことなくさつとボールに駆け寄り、奪い取った。目の前に出来ているスペースをドリブルで駆け上がると、前線で張っている大城を走らせるようなボールを蹴った。

狙い通りに大城政は全力で走り出した。

パスを読んでいた橋本英樹が、すつと大城へと身体を寄せた。軽く肩を当て、ボールを奪取。

しかしその後のボールタッチを誤って大城に取り返されてしまう。すぐさま後を追うが、大城の急加速についていかれず、あっさりとぶち抜かれた。全力で追い続けるが、あと一步というところで間に合わず、シュートを打たれてしまった。

チェイシングの甲斐もあってそれは角度のない厳しいところからのシュートになったが、なかなか狙う場所も弾道も勢いも鋭く、あわやゴールになるところであったが、GKの吉田健二が身体を倒しながら両手で上手く弾いてCKに逃れた。

「氣い抜いてんなよ」

CBの相棒である後藤権三が、橋本の肩を自分の肩でどついた。

橋本は無言のままCKの守備につく。右腿にテーピング。足ならばサッカー選手として分かるが、右腕にも、ぐるぐると包帯を巻いている。むしろこちらの方がよほど重症に思えるが、腕だしプレーにはあまり関係ないだろう。

現在行われているのは練習中のミニゲーム。ハーフコートを使っていた、八対八である。

本来はフルピッチでやりたいところであるが、人数の関係で仕方がない。Aチームなど、正GKの木場芳樹が仕事で遅れるというところで、FPである小笠原慎二が代理をつとめているくらいなのだから。

それでも今日はまだましなほうで、最悪な時など、女子マネージャーの三宅梓がGKをやったこともあった。何が最悪かって、偶然なのか何なのかファインセーブミラクルセーブの連発で、それからしばらくの間FW陣がすっかり自信を失ってしまったのだ。

新監督のコージはピッチの外で、腕を組んで、試合の様子を見ている。時折指示を出す、基本は選手任せ。ただニコニコと、笑みを浮かべているだけだ。

ＣＫのキッカーは野木基。

手を上げて合図をすると、軽く助走し、強く、蹴り上げた。山なりに、ファーへ。

待ち構えていた芹沢恭太が高く跳躍、頭で中央へと折り返す。

ゴール前中央で、滝本孝と橋本英樹が身体をぶつけあいながら跳んだ。

競り勝った橋本が、頭で大きくクリア。着地すると、そのまま駆け上がった。

クリアボールを拾った和歌収からパスを受けて、橋本はぐいぐいと上がっていく。

まだ前線の人数が少ない。野木を背負いながら、少し溜めを作ると、反転、ロングパスを反対サイドにいる恭太へと送った。

だが少し力んでしまったかボールが長くなってしまい、ラインを割った。

「ハッシー君、いまの一連の、とても良かった！」

コージが拍手で褒める。

「でも、連係ミスは仕方がないが、個人のミスはしてはいけない」

正論だ。ＤＦが攻め上がる以上、下手な奪われ方をしたら失点に繋がりがねないからだ。

橋本は無言で、自分のポジションへと小走りで戻っていく。

「なんかお前、暗いぞ」

権三が、また肩をぶつけてきた。

「暗くなんかねえよ」

とりたてて明るい性格でもないが、暗くもない。と、思っている。今日だって普段通りだ。

タッチを割ったことで、滝本のスローインでリスタート。

恭太は足を伸ばしたが、僅かの差で奪えずに、野木へと渡った。

野木は単純にロングボールを前線の広田光へと送った。

広田は胸でトラップするとすぐさま反転、ドリブル、しかし次のプレーを考えるがあまりボール処理を誤ってタッチが大きくなり、ゴールラインを割ってしまった。

吉田のゴールキック。近くの橋本へ丁寧パス。

橋本は、今度は全体を見渡しながらゆっくりドリブルで進むと、大きく最前線へとフィード。

繋がった。FWの大道大道が、DFをかわして走り出し、上手く足の中を受けて、ドリブルで独走だ。

俊足というほどでもないが、とにかく腕を思い切り振り、ガムシヤラに、ぐいぐいと突き進む。

ゴール前には臨時GKである小笠原が、腰を落として身構えている。

相手が素人だからか、大道にはGKの姿が、なんだか豆粒のように小さく見えた。

行ける！

右足を振り抜いた。

大道スーパードリブルシュート！

GK初体験の小笠原は、横っ飛び、右手で弾いた。

「ガーリーン！」

大道はがつくり地面に両膝を付き、両手を付き、うな垂れた。

しかしながらBチームはCKを得た。

キッカーは和歌歌。

ボールをセットすると助走し、蹴った。

ゴール前中央へ。まるで特注申請したかのような、まさにどんぴしゃの素晴らしいボールが橋本へと渡った。ほとんどが偶然とはいえ、しかしせつかくそんな良いボールが上がったというのに、橋本はヘディングを大きく打ち上げてしまった。跳躍するタイミングが遅れてしまったのだ。

「ああもう、あんなまたとないボールを外すかなあ。みんなハッシ

「さんには期待してんですからね。よっ、Ｊリーガー一步手前」

と大道が、直前の自分のヘマを棚に上げてからかった。

橋本の表情が変わった。

ゆっくりと、大道へ近づいてきた。

どん、と胸で胸を突き飛ばした。

「ふざけんなてめえ！」

橋本は、いきなり切れたように叫んび、掴み掛かった。

取っ組み合いになった。だが、体格差が大人と子供。橋本の腕力の前に、大道はまったくかなわず、いいように髪や鼻を引っ張られている。

「いてて、鼻いて！ ちょっと、なんで？ なんで怒んの？ ふざけてないっつか、ふざけんのおれのキャラでしょ！」

大道は必死に振りほどこうともがく。

「ふざけてんのはお前の名前だけで充分だったの」

お笑い芸人の山田山田やまださんたかつ一の。

「あ、あ、それいっちゃいます？ いてていてて、頭を拳でごりごりすんのやめてくださーい、禿げる！」

「おい、お前らしい加減にしやがれ」

日野浩一が仲裁すべく二人の間に入ろうとするが、かつとなつている橋本にどんと胸を突き飛ばされ、

「ぶっ殺すぞてめえら！」

一瞬で沸騰し脳の血管がブチ切れてしまった。仲裁するどころか野太い叫び声をあげながら二人の胸倉をそれぞれぎゅっと掴んだ。

「やめろやめろ」

芹沢恭太が日野の手を離し、大道と橋本との間に身体を入れて両者を引き離した。

橋本は、まだ興奮したようではあるが、すっかりおとなしくなっている。

「なんでおれが間に入るとますますヒートアップして、キヨンさんがいうと収まるんだよ」

「知るか」

「くそ。あつたまくな。つつか、そもそもくだらない喧嘩してんじゃねえよ」

日野は、橋本の胸を軽く押した。

橋本は、日野の極道映画のような表情や声にまったく動じることなく、呆然とした表情で突っ立っている。と思うと、突然大道の身体を抱きしめた。

「ごめんよダイドーごめんよ。おれのかわいいダイドー。鼻つまんで引っ張っちゃったりして。梅干ぐりぐりしちゃって」

「いや、おれハッシーさんのものじゃないんですけど」

3

「うまい！」

日野浩一はビールを一気に飲み干すと、口から泡を飛ばしながら叫んだ。

上機嫌である。

練習中のミニゲームではあるけれど、三点も決めたからだ。

ここは居酒屋兼家庭料理の店、ぷうりん。

後藤権三が経営している店で、イクシオンACの練習場から徒歩でそれほど遠くないため、練習後に飲みに行く場合にはここを使うことが多い。

現在夜の九時。仕事帰りの中年サラリーマンたちを主として、学生だけ女性だけのグループもあり、店内は非常に賑わっている。

イクシオンACの選手たちはほとんどが二十代、しかも前半の者もいるというのに、どちらかといわずとも中年サラリーマンたちと同列の存在感を放っている。顔馴染みが店をやっているところからくる態度の大きさも原因かも知れないが、単純にチームにそういう人種が多いということだろう。

「他人のビールもうまい！」

日野は、半分残った和歌収のジョッキをひったくると勝手に空け

てしまった。

「お前はビールがクソまずいだろうな」

と、大道大道に舐めるような嫌らしい視線を送った。

「ちよつと、ちよつと、ノッコさん、なに調子に乗っちゃってんですか、たかだか練習でゴール決めたくらいで。男は本番で結果出しいいんですよ！ おれ開幕戦、決めてんじゃないですか」

今日の練習で行われたミニゲームで大道は、味方から良いパスを何度ももらったというのに外しまくって、一点すらも取ることが出来なかったのだ。GKの木場が仕事で遅れるということで、代わりにFPである小笠原がGKをつとめていたというのだ。

「そうして過去の栄光に縋り付いてるがいい。来年になっても、おれッ、こう見えても去年の開幕でゴール決めたんだぜッ」

日野は大道をおとしめたいのではなく、単に自分を褒めたいのである。ボランチで三点取った自分を。

「あの一発だけなわけじゃないでしょうが！ これからだって、点取りますよ。取り続けますよ。だいたいビールうまいもなにも、ノッコさんは味覚が鈍いから気分よければなんでもうまいんですよ。うまい！ って味も分らないくせにジョッキ突き出してまあかつこつくて。犬のオシッコでも気付かないくせにさあ。ゴンさん、ノッコさんのだけこつそり発泡酒にしちゃっていいですからね！」

「お前こそ発泡酒にしたほうがいいんじゃないか？ 金ないだろ？」
給仕としてあくせく働いている権三が、両手に重たそうなお盆を持っけてきた。仕事抜け出してサッカーをさせて貰っている分だけ、普段は頑張っただけならいいのだ。

「まだ退職金があるから飲めますよ。あと二回くらいは」

大道は半年ほど前に人材整理でバツサリ切られ、退職金も雀の涙、現在近所のコンビニエンスストアでアルバイトをし、貯金を切り崩しながら就職活動中の身である。

「なに、お前、シンを相手に決定機を外しまくったんだって？」

木場芳樹。仕事で遅れて今日のミニゲームには参加出来なかった

が、チームの正GKである。

「ああもう！　なんで蒸し返すのかな。いちいち聞かなくて、さっきの話聞いてりやあ分かるでしょう」

大道はがりがりと両手で頭を掻いた。ファングさん、落ち着いた大人っぽい外見のくせして、たまにこうやって子供のようにチクチクくるからやんなるよな。

「そついやハツシーの奴、むすつとした顔のままさつさと帰ってしまっただけ、なんかあったのか？」

木場が尋ねる。

「なんかあったもなにも、なんすか、ありや。今日のハツシーさん、すっげー気色悪い。人の鼻ぐりんぐりん摘まんて引き回しておいてさあ、いきなり抱きしめてくるんですよ。ダイドーかわいいよダイドーって。練習終わったら口もきかないで缶ビール買ってとつと帰っちゃうしさあ。ジューズ一本くれたけど」

「遅れました。ちょっとタツヤに寄ってたので」

大道がこぼしていると、コージが店内に入ってきた。アニメカテレビゲームの本でも立ち読みしていたのだろうか。

空いている席につくと早速、ビールと枝豆とプリンを注文した。

「ダイドー君、大声で楽しそうになんの話をしていたんですか？」

「気味悪がってるだけっすよ！　ハツシーさんのことをさあ」

大道は、今日の練習中に起きたことを話した。コージも遠くから見てはいたが、会話など細かなやりとりまでは知らないからだ。

「そんな感じで、今日は最初からなんか変な感じでさあ、で、コーナー外した時だったかな、おれが、いよっ」リーガーっていったら、急にブツツとなっちゃって。ほら、ハツシーさんって、もとJFLで、しかも……その、あれだから……相当プレッシャーやらコンプレックスやらで苦しかったのかな、って、悪いこといっちゃったかなとは思ってるんだけど。あんなキレちゃうくらいだから」

「いや、そういうことならたぶん恋の悩みでしょう」

コージはあっさり断定した。

「こら、そのオッサン！　いまのおれの話でなんでそういう結論になるかなあ」

大道は脱力して机に突っ伏した。

4

夜道。空に雲はほとんどなく、真つ白な満月から光がぎらぎらと振り注いでいる。

橋本英樹は一人、歩いている。

右腕にまかれた包帯に手をやると、ひきちぎるように取ってしまった。

くつきりと、動物の歯型がついている。ぼつぼつと紫色の痣が出来ていたり、皮膚に牙の穴があいてしまっていたり、酷い有様だ。

橋本は、昼間は動物病院で働いている。獣医の助手だ。避妊手術をする中型犬の、腹の毛を剃るうとしていたところ、迂闊にも診察台から逃げられてしまい、病院全体大騒動。運の悪いことに来客が開けたドアから外に逃げてしまい、大通りに飛び出す直前、なんとかラグビーのタックルのように飛びついて捕まえたのだが、その際に必死の抵抗を受けて腕を噛まれてしまったのだ。

それが、今朝のことである。

酷い怪我といわれればまったくもってその通りであるが、それより何よりも恥ずかしくて、一日中ずっと包帯をまいていた。ノッコ（日野浩一）のバカに、くつきり歯型くんとか歯型王子とかふざけたあだ名つけられそうなのも嫌だったし。

そんな感じに仕事は散々であったし、その後のチーム練習もどうにも気が乗らず、それどころかつまらない喧嘩までしてしまった。

おれ、今日は本当に、ぼーっとしているよな。

無理も、ないか。

だって……

家に着いた。

古びた木造二階建てアパート。一階真ん中の、2Kの部屋で彼は

一人暮らしをしている。

ドアを開けると叩き付けるような猛烈な勢いでカビ臭さが襲ってきた。歴代住人が蓄積してきた元々の臭いだけでなく、橋本自身も相当にカビを発生させるような生活をしているからだ。冷蔵庫の横にあるビール袋の中に田舎から送ってもらった八朔が入っているのだが、当初は綺麗なオレンジ色であつたがおそらくいま袋をひらけば毒々しい青ミカンだ。

サッカー雑誌やらエロ本やら食べ終わったカップ麺のカップやら
の散乱している部屋の中央には万年床。そこにどっかり腰を下ろすと、リモコンを手に取りテレビをつけた。お笑い番組がやっている。買ってきたビールを早速一本開け、一口。

酔いも回っていないというのに、いきなり叫んだ。

「どこがやねーん！」

などと、突っ込むんだろうな。ダイドーなら。がはは笑いしながらさ。

あいつはさ、ほんと明るいよな。それだけでも、おれにとっては本当にたいしたもんだ。酷い振られかたを何度も経験しているといっていた。具体的にどう酷いのか、酒の席で笑いながらに話をしていたけど、それを聞いた時、おれちよつと振るえ上がった、おれならきつと自殺してるなって。百歩譲って死なないまでも、少なくとも新しい恋なんか絶対にしない。

番組がつまらないのでチャンネルを変えた。

結局、他のどの局も面白くないのでテレビを消した。

ビールも飲み終えたし、寝ることにした。

ごろんと横になる。

横になったところで、つまみを買ったことに気づいた。

いいや、いまさらもう。

目を閉じた。

そのまま何分かが過ぎたが、しかし眠れない。寝つきは相当にいいほうなのに。ビールも飲んでいるし、絶対に眠れるはずなのに。

上半身を起こした。

傍らに、もう一本ビールがある。帰ってきて冷蔵庫に入れるのを忘れたものだ。それを手に取り、開けた。

ぶちゅぶちゅと泡が出てきて、すぐにそれを口を当てて吸った。

一本目ですらちよつとぬるくなっていたくらいなので、こちらはもうほとんど常温。

ベルギービールみたいなもんだ、と無理矢理自分を納得させようとするが、当然というべきか、全然美味しくない。

ビール缶片手に立ち上がった。

ちよつと味に変化をつけようと、キッチンにある醤油を、缶の飲み口にちよつと垂らしてみる。

「では、あらためていただきまーす」

口に含んだとほぼ同時に、ぶふつと噴き出した。

「金返せ畜生！」

ひでえ味だこれは。殺人的なまずさだ。

捨てるのもつたいないので、根性で飲み干した。くらくらする。

気持ち悪い。

バカなことした。

万年床の上に戻り、掛け布団の上から、横になった。

しかし、やはりなかなか眠れない。眠れないでいるうちに、最初に飲んだビールが、おしっこになってきた。

トイレ面倒だけど、行くか。メーカーもアホだよな、利尿作用のないビール作ればヒット間違いなしなのに。

外に出て、建物の端にある共用トイレで用を足すと、手も洗わず戻ってきて、また掛け布団の上に横になった。

天井からぶら下がっている電球が、かすかに揺れているのに気づいた。

上から、ぎつちぎつちと軋むような音。だんだんと大きく、はつきりと聞こえてきた。

確か真上の部屋には若夫婦が住んでいる。

くそ、平日の夜だつてのに。

銚で天井ついたらか。

どうでもいいや。他人のことなんか。

ふう。とため息をついた。

って、なにがふうだよ。なんに對して。サッカーか？　なんだ？
考えるまでもない。おれの、全部がだよ。

橋本は、去年の夏にこの北海道へ、イクシオンACへとやってきた。それまでは、地元である石川県のJFLのクラブにいた。

守備力強化のために是非と乞われて、二つも上のカテゴリーからやってきたわけだが、実をいうとJFLの試合に一度も出場したことがない。それどころかベンチを温めたことすらもない。それを承知の上でクラブから頼まれ、移籍を決断した。

ここの選手とは、誰ともその話はしたことはないけれど、きっとみんな知っているのだろう。JFLなんて、試合記録を見ることなど誰でも簡単に出来るのだから。

その頃、彼女がいた。

移籍で石川県を離れる際、少し距離を置こうかと自分から話を持ち掛けた。要するに、別れようということ。もしもいつかまためぐり合つて、その時にお互いに相手がいなかったらまた付き合うこともあるかも知れないが。

それからずっと、後悔しているようなしていないような、自分でも自分の気持ちに分からない。あの時どんな気持ちだったのか。いま現在、どんな気持ちでいるのか。

でも、あの劣等感の塊だった自分に、北海道までついてこいなどといえる勇氣はなかった。

せめて、一試合でも出ていれば、また違っていたのだろうか。

とにかくもう、あたらしい彼氏を見つけていることだろう。もう終ったことだ。

そう思っていた。

しかし、自分の中では何も終わっていなかったのだ。
自分の心が、まさかここまで弱いなどとは思ってもいなかった。
石川県の友人から久しぶりに電話があり、その友人から、彼女が
知らない男と一緒にいるのを見たと言った。

手を取って引つ張ったり、気軽にボディタッチをしていてとても
仲が良さそうだった。

どくん。それを聞いた橋本の心臓は高鳴った。

間違いない。

それは新しい彼氏だ。

間違いない。

昨日の晩の電話である。

それで今日はこの様だ。

「くそ。眠れねえ」

立ち上がった。

利尿作用のないビール作ればいいのに。つつか上、銚で突くぞ。

5

シュートを打たれた。

完全にノーマークにしまっていた。崩されたわけではなく、
単なる個人の判断ミスから。それでもGKの木場芳樹は鋭い反応を
見せ、横っ跳びで食らいつこうとしたが、その頑張りも虚しくボー
ルはグローブの指先を弾いてゴールの中へと吸い込まれた。

後半二十分、1-1。

前半に、カウンターが綺麗に決まって大城のゴールで先制したイ
クシオンACであるが、そのリードを守り切ることが出来ず、同点
ゴールを許してしまった。

五月二十七日 日曜日

帯広市営陸上競技場

道東ブロックリーグ第二節 すずらんファイターズ 対 イクシ

オンAC

どんどんどん、すずらんファイターズのサポーターの太鼓が鳴った。

細い黄、緑、黒のストライプのユニフォームレプリカ、二十人ほどのすずらんファイターズのサポーターたち。赤色のレプリカ、アウェイであるはずのイクシオンACの方が十倍は多い。北海道を分割した狭い地域の中で行われるリーグだけあって、ホームかアウェイかはそれほど関係なく、とにかく存在するサポーターの絶対数がおおよそそのままゴール裏の人数として表れるのである。

木場は地面を叩いて悔しがっている。届かなかったわけではない。グロープに確かな感触があっただけに、なおさら悔しさが倍增する。その近くでは、CBの橋本英樹が呆然と立ち尽くしている。

失点は、橋本のミスからであった。相手の蹴ってきた単純なロングボールを頭で跳ね返そうとしたところ、処理を誤って相手FWに渡してしまい、そのまま持ち込まれてシュートを打たれてしまったのだ。

イクシオンACボールでキックオフ。

大道大道は、横にいるツートップの相方、大城政へと転がした。相手が走り寄ってきたのを引きつけ、大城は大きく蹴った。

芹沢恭太がサイドを駆け上がり、ボールを受けた。

同点にされた焦りが無意識にあるのか、恭太は二人に囲まれながらも無理な突破を図って結局ボールを奪われてしまった。

すずらんファイターズのボランチ米本将吾はサイドライン際をドリブル。速度を緩め、SBのオーバーラップを待つが、その前にイクシオンACのボランチである日野浩一が雄叫びをあげながら背後に密着してきた。後ろから伸びてきた足に蹴り出されて、スロースローになった。

とりあえず難を逃れたイクシオンACであったが、しかし、そのスロースローを基点に細かなパスが繋がって、あっという間にゴール

近くまで運ばれてしまった。

そして、CBの後藤権三が、相手FWの鈴木達雄に抜かれてしまった。

「ドアホ！」

権三は叫んだ。

橋本英樹がぼーっと残っていたせいでオフサイドトラップを仕掛けるのに失敗したからだ。

斜めから、全力で腕を振り橋本が向かう。絶対的なピンチになるかと思われたが、鈴木達雄がボールタッチを誤ってしまい、その間に追い付くことが出来た。

橋本と鈴木達雄、対峙はほんの一瞬であった。

橋本は本職DFだというのに鈴木ของフェイントにあっさり引っ掛かって、いとも簡単に抜け出されてしまったのだ。

そして次の瞬間、鈴木は地に転がった。

笛が鳴った。

腕を引っ張り転ばせたとして、橋本にイエローカードが出された。橋本は、いらついたような、申し訳なさそうな、そんなやりばのない顔で、足を踏み鳴らした。

普段の橋本と比べてあきらかに調子が悪い。まあ、ここ数日の橋本を見ている者からすれば、やっぱりなということなのだが。

守備の要であるCBがこのような調子だというのに、1-1というスコアだけを見ればしっかり戦えているように見えるが、それはさほど不思議なことではない。単純に相手チームのレベルが低いからである。開幕戦である前節も、というシーズン前降格候補を相手に9-0の大差で負けているのだから。

つまり、イクシオンACが前半に先制したのであれば、相手が引いて守れなくなったのを利用して、四点、五点、六点と積み掛けられなければならないところなのである。これはあくまで、Jリーグを目指すチームの気の持ちようの話というだけであるが。イクシオンACにしても、残留争いをした去年と同メンバーということでは

間的にはずらんファイターズとどっこいどっこの評価なのだから。

イクシオンACの監督、コージは何を考えているのか黙って腕組みをし、戦況を見つめている。

そのすぐ近くで、控えDFの滝本孝がどうにも焦れたいといったオーラを盛んに発している。

さもあるう。いくら橋本が元JFL所属の選手であろうと、現在ピッチ上でご活躍なされているあの有様よりも自分の方が下に見られているのではたまったものではない。（負けこそしたが）コージの初戦でのあの魔術のような采配を見ていなかったら、とつくに切れて文句をいっていたことだろう。

そんな滝本孝の思いなどは知らず、橋本の絶不調なプレーはなおも続く。

「てめえ、ふざけてんじゃねえよ」と、珍プレーを見せられる度に怒鳴り、叱咤していた後藤権三であったが、なおも酷さの加速の止まらないこの状態に、もう何もいえなくなってきた。見ていて、なんだかあまりに哀れで。監督も、替えてやりやいいのに。

また、気の抜けたプレーであつさりと抜かれかける橋本であったが、権三のフォローで、なんとか持ちこたえてなんとか必死のクリア。

運良く失点しなかっただけで守備陣ボロボロだというのに、元凶たる橋本本人が、自分のクリアしたボールを追って前方へと走り出した。不様なプレーで失った信頼や自信を取り戻そうということか、完全連携無視の無謀な攻め上がりであった。

結果は案の定。クリアボールは相手に拾われ、がっばり空いた守備の穴へと大きく放り込まれ、橋本の攻め上がりはただ単に大ピンチを招いただけであった。

左右のSBも慌てて下がろうとするが、それより問題は中央だ。たまたま前目のポジションを取っていたずらんファイターズの攻撃陣が、このチャンスに逃すなとばかり三人、四人と上がってきて

いるというのに、迎え撃つDFが権三一人しかない状態なのだから。

大波にざんぶり飲みこまれる小人。この人数差の前に権三一人では、攻撃を遅らせることも、パスコースを邪魔することも、どうしようもなかった。

中途半端なポジションのままずる下がるだけの権三の前で、松浪裕太から鈴木達雄へと横パスが繋がり、ついにシュートを打たれた。完全ドフリーの、ぽっかり空いたゴール真正面から。

鈴木シュートは蹴り損ねたのか少し威力が弱かった。それでもしっかりコントロールされ、隅の隅をしっかりと捉えており、木場が横っ跳びで指で触れ、弾き出してみせたことは充分にファインプレーといって良いだろう。

「ダメかと思った」

権三、熊のような顔を複雑に歪めて安堵のため息。

ちらり、と守備に戻ってくる橋本の顔を見遣った。やっぱりここはバカヤロウとガンといってやるべきだろうか、と迷っていると、
「バカヤロウ！」

既に日野浩一が、橋本の頭をガスガスガスと容赦なく小突いている。

「やめろノツコ、ハッシーだって生きてるんだぞ。感情があるんだぞ」

すずらんファイターズのCK、キッカーは緑川輝夫。

小さく助走し、蹴った。

山を描き、ゴール前の混戦の中へ。

真ん中で橋本と山田久が身体をぶつけ合い、跳躍した。

ゴツ、二人の頭がぶつかり、鈍い音が鳴った。

橋本は着地と同時に、力抜けたように倒れた。

ぴよぴよぴよ

無数の天使が輪になってくるくる回っている。

打ちどころが悪かったのか、大の字になって完全にのびてしまっ

たようだ。

ボールは間一髪のところまで恭太がクリア。

こぼれを大城が拾ったが、すぐタッチラインの外へ出した。橋本がまだ起き上がれないでいるからだ。

担架が呼ばれた。

おれ、もうだめだ……

真っ白で何も見えない世界の中、橋本はそう思った。

その時である。

「ヒデ君！」

彼女の声が聞こえた。いや、正確には元彼女の声だ。朦朧とした意識の中に、はっきりと飛び込んできた。

しかし、なぜだ。

なぜこんな北の大地に、石川県にいるはずの彼女の声か。

ああ、そうか。

おれは、もうじき死ぬのか。いわゆる走馬灯というやつか。

悔いのない、人生であつたろうか。

おれの山河は美しかったであろうか。

否。

悔いばかりある、人生だった。

だが、人はそれでいいのではないだろうか。

無から生まれ、有を残して再び無に帰す。

それはすなわち、有から生まれ有に帰すということと同じではないか。

素晴らしい人の人生、おれの人生。

「ヒデ君！」

彼女、吉澤悠子の叫び声に、橋本は、うつすらと目を開いた。

「うわ、本当にいる！」

飛び上がったのも無理はない。去年別れた彼女の姿が、観客席の中にあるのだから。周囲に人のほとんどいないバックスタンド席、見間違えるはずはない。

なぜこんなところに。

しかし悠子……あれから一年近く経っているというのにまったく変わっていないな。

新たな恋人と、うまくやっているのだろうか。それとも、うまくいっていないから、思わずこんなところへきたのだろうか。

いやいや、うまくいっていないはずないだろう。友人の報告では、仲良さそうだったって聞いたではないか。

いやいやいや、終わったことだ。

悔いある人生で結構だ。

ああ、結構だ。

「あんた、そんながばつと起き上がっちゃだめだよ。頭やつちやつて倒れてたんだからさあ、早く病院に行かねえと」

初老の主審が近寄ってきた。

「いえ、行きません」

きっぱり断った。ノーサンキューだ。

病院などに行ったら試合に出られないではないか。

自分でもよく分からないが、橋本の心は燃えていた。内側から、懇々と力が沸き上がってきていた。無性にチャレンジしたい気持ちであった。

これまで自分の内面になかったその感覚に驚くとともに、それがとても心地好かった。

結果どうなるかは時の運だけど、

とにかく、悠子に不様な姿は見せられない。

だって、おれとの思い出も、良き一ページだったと思えなきゃ、お互い、あまりにも悲しいじゃないか。

橋本は突然に雄叫びをあげると、両の拳で、自分の顔面をばかすかと殴った。

「おれさ、生まれ変わったかな」

心境の変化などそんなリアルタイムに他人に分かるはずもないというのに、つい権三に聞いてみた。

「生まれ変わったもなにも、酷い顔になってんぞ、バカか」

ずらんファイターズのスローイン。日野が背後から足を出して上手に奪ったが、横から近寄ってきた田中勇に、すぐ奪い返されてしまった。

田中勇はロングボールで一氣に前線へ。

走り出す鈴木達雄。

オフサイドはない。

絶妙の飛び出しを見せたかに思われた鈴木であったが、気付けば橋本がぴつたりと密着している。

鈴木の方が先にボール落下地点に先に入り込んだが、先にボールに触れたのは橋本であった。長身に加えてその高い跳躍力で、鈴木の上から楽々と跳ね返して、味方に繋げた。

観客席から拍手が起きた。

「そんな単調な攻めが通用するかよ」

今の今まで通用していたからこそだというのに、橋本は知らぬ顔で大威張り。

日野は緑川輝夫を引き付け、恭太へとパス。

恭太はサイドを疾走し、ひらり米本将吾をかわすとセンタリングを上げた。

ゴール前ど真ん中、走り込んだ大道がジャンピングボレー。完全に枠を捉えていたが、しかしGKの読みと必死の横っ跳びで弾き出されてしまった。

「完璧だったのにニョニョー」

大道は両手で頭をかかえ、悔しがった。

しかし、イクシオンACはCKを得た。

権三、橋本、長身の選手たちが上がってくる。

キッカーは和歌収。

助走し、蹴った。

ゴール中央、田中勇はクリアしようと跳躍した。

田中勇は身長百七十八、決して小さくはないのに、しかしそれよ

り遥かに高く、橋本の頭があつた。

「橋本アクトツ―！」

上空から、頭を激しくボールに叩き付けていた。

さようなら、悠子。

決別の、逆転ゴール。

そして、試合終了を告げる笛が鳴った。

6

「1、2、3、ダー―ツ！」

橋本英樹はゴール裏のサポーターたちへ向かつて右腕を突き上げ、張り裂けんばかりに絶叫した。

歓声、拍手で応えるサポーターたち。どんどんと太鼓の音。

「うじうじしてた奴が、なんだか変わりすぎじゃねーかよ」

権三が橋本の頭を肘で小突いた。

「うじうじなんか、しちやいねえよ」

橋本はゆっくりと振り向き、バックスタンド中央へと視線をやった。

そこには、元彼女の吉澤悠子。そして、さっきは気付かなかったが新彼氏と思われる風貌の男がいる。

友人のいつていた通り、確かに仲の良さそうな二人に思える。なんだか兄妹みたいに顔立ちが似ているしな。

新たな男の存在を視認したことで関係の完全終局を感じた橋本であるが、しかし心は晴れやかであつた。

面はおれのほうが少しハンサムだけど、ま、やさしそうな彼氏じゃないか。

いいんじゃないか。

それで、彼女が幸せになるのなら。

そう心に呟きながら、バックスタンド中央へとフェンス沿いをゆっくりと歩き出した。

彼女も階段を下りて座席の一番前までやってきた。

橋本は足を止めた。

二人はフェンス越しに向き合い、見つめ合った。

「久しぶり」

先に口を開いたのは、橋本であった。

「そうだね」

彼女は恥ずかしそうに軽い笑みを浮かべている。

「どうしたんだよ、こんなところまで」

どんな答えだとしても、シヨックはない。心から、彼女の新しい人生を、選択を、応援出来る。だから橋本は心から微笑み、尋ねてみた。

「うん。ちょっと家族旅行で、こっちに来ててね。お父さんお母さんはいま別のところ行ってるんだけど。あ、あれ、あたしのお兄ちゃん」

彼女は、後ろにいる男を手でさした。

「え――――――――――っ！――――――――――」

――――――――――

びつくりした橋本、あまりの凄まじい大口にアゴが外れてぐっさり地面に突き刺さった。

彼女は橋本の腕をぐいと引っ張った。そして橋本の耳に、そっと口を近付けた。

「距離置こうなんていわれたけどさ、距離なんて、置けるわけじゃないよ。遠距離なのは平気だけど、我慢、出来るけど、心は、離れたくない」

囁くように、はつきりといった。

橋本は、しばしばうぜんとしていた。

はっとしたかと思うと、急に顔が真っ赤になった。

彼女の身体をぐっと突き放すと、改めて腕を取って引っ張り寄せた。

「お、おれ、必ず、迎えに行くから。もっと、大きくなって、いや、その、色々としっかりしたら、必ず。だから」

しどろもどろながらも、なんとか思いを伝えようとする橋本であったが、途中でまったく言葉が出なくなった。
顔をくしゃくしゃに歪め、泣き崩れてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5634t/>

きらりキラリ

2011年8月13日03時29分発行